

特101

249

Essence Series

フネーゲルツ

地耕耒

廣嶋觀一



始





エッセンスシリーズ

大正
3. 9. 21
内交

特101
249

エッセンス叢書發刊の趣旨

近頃一體に縮刷と云ふことが流行して参りました。結構な事でういます。従前ならば大判で五冊も十冊もあつて、廣からぬ本棚に大きな場所を取り、またそれに相應するだけの高い價を拂はねばならなかつたものが、ちよいとポケットにも入れて歩けるやうになり、價も随つて格好になつて参りました。

結構は結構ですが、これだけではまだ、今日のやうに忙しい生活をしてゐる人々の、限りなき讀書慾を満足さす上に十分であるとは申されません。

なぞと云つて、今日の所謂縮刷は、容積と價格とだけの縮少であつて、實質的内容の上の縮少でない。原版の内容が十萬語あるものならば、縮刷版の内容もやはり十萬語はある。原版を通讀するに十時間かかる者ならば、縮刷版を通讀するにも同じやうに十時間かかる。否むしろ、文字が細くなつて讀みにくい場合など、十時間のものは十三時間十五時間もかかるかも知れないのであります。

乃ち、縮刷の次ぎに来るべき要求は、當然この「内容の縮刷」でなければなりません。十萬語のものは一萬語乃至五千語にも書き縮めて、十時間か、つた通讀を、一時乃至半時間でも出来るやうにする。目の廻るほど忙しい人々へ、その人達の讀みたいと思ふ傑作名著を、純粹のエッセンスだけに煎じつめて供給する。これこそ、今日の一般讀書界が痛切に要求してゐる本當の縮刷ではありますまいか。私共のこの「エッセンス叢書」は、何よりも先づこの要求に應じて計畫されたものであります。

ながながと効能を述べ立てるのも、お互に時間の浪費となりませう。この叢書が、如何に澤山の内容を煎じつめてゐるか、如何に高尚な思想を解り易く噛み砕いてゐるか、如何に廉價にしかも體裁よく世界的の大著作を提供してゐるかは、その一冊をでも御一瞥下さつた方には、直ぐに御分りになる事と信じます。

大正三年七月

青年學藝社同人

ツルゲーネフ作

未 耕 地

廣島觀一郎編

解題

本書の作者イー・エス・ツルゲーネフは、一千八百十八年の生れで、「パラシヤ」といふ物語詩を書いて、時の批評家、ベルンスキイの認めるところとなり、文壇的生活に入つてから、一千八百八十三年巴里の寓居でその偉大な生を終つたまでに、無数の短篇、五六の長篇の作があるが、我等が驚くべきは、いづれの作を見ても一として名作でないものはない點で、彼の藝術が如何に偉大であつたかといふことである。

「未耕地」は一千八百七十六年の作で、彼の作風が象徴的色彩を帯びた最盛時の作である。前後兩卷三十八章の大作、本書に於いては、便宜のため、例へば、「樺の林」、「並木路」、「留守の間の卓の上」、「隠れ家」といふ風な場所の名を用ひて、章を區切ることにした。右は各々「戀と戀」とか、「新生活」とか、「生と死」など、

いふ抽象的な名に取り換へることも出来るが、譯者がさういふ説明的な名を付するに忍びないまでに、本書に於いては、ある場所にある事件が起つた、けれどもその「ある場所」のほかでは、かゝるその「ある事件」は起り得ることがないであらうと思はるゝまで、場所がその事件を惹起したかと怪しまれる程に運命的色彩を帯んだ描寫があるからで、殊にかういふ名を選んだのである。ツルゲーネフは形式に於いてプーシユキンを師とし、内容に於いて、ゲーテを師としてゐるので、形式に於いての師、プーシユキンは自國の詩人であるだけ彼も亦形式に於いては天下獨歩である。本書は殊に其の點については殆んど満足な紹介をなし得たことと信じる。

「未耕地」は個人の運命を賭した破滅的な政治運動を背景として、二人の人を中心にした二つの輪の戀愛關係——一つは、ネズダーノフといふ青年を中心にして、マシユリナ、シビヤーギン夫人、マリヤンナといふ三人の愛、一つはマリヤンナ

といふ女を中心にして、マルケロフ、ネズダーノフ、ソローミンといふ三人の青年の愛、この二つの愛の相互交流が織りなす綾は、作者の運命的な悲しみの色に上覆ひされた象眼細工なのである。

未耕地

イー・エス・ツルゲーネフ作

廣島觀一郎編

未耕地を耕すのには、表面を掠るばかりの耙まわではなく、深く掘り返へす犁すまでなければならぬ。——ある農家の主人の手帳から。

主あまじの留守るす

一千八百六十八年の春のある日のこと、ホテルブルグのオフィツエルスカヤ街がいのある五階家の一室を無造作な汚い服装なりをした二十七ばかりの男が訪ねて来た。

主人のネツダーノフは留守であつたが、先に來てゐた客のマシユリナンといふ女が、『私がぬますからお入りなさい、あなたはオストロドウムさんでせう。』と奥の部屋から聲を掛けた。オストロデューモフが入つて來ると、二人は黙つて握手をし、座につくとそのまま黙り込んで煙草ばかり無暗にふかしてゐた。この兩個の煙草吸には、顔の恰好が全然異つてゐるのに、どこやら同じやうなところがあつた。大きな唇や齒や、大きな鼻と共にその無造作な姿に、正直な辛棒強いところが表はれてゐた。

主人のネツダーノフは圖書館に書物を返しに行つたのだから、すぐ歸つて來る、あの人は退窟に苦しんでゐる、といふマシユリナの言葉を聽いて、オストロデューモフは奮然として言つた。

『退窟で困つてゐるんですつて！あの人の我儘にもあきれろ！大方あの人は、我々にはあの人のする仕事がないとても思つてゐるんだらうが、どうぞ残りなく仕事の方がつけばいいがと我々はどんなに心配してゐるか知れない。それなのに、あの人は退窟に困しんでゐるんだとさ！』それからモスコウから手紙で、自分にもマシユリナにも來て呉れと言つて來たので、實は旅費の工面をネツダーノフに頼みに來たのだと言つた。そしてマシユリナがその手紙を讀みたさうにしたので、持つて來てゐるから見せませうかと言ふと、少し違つて、いえ、それには及ばない、後で三人で讀まうと言ふので、『私は本當のことを言つてゐるんだから、疑ぐらなくつてもいい。』と彼は呟くやうに言つた。そのまま又前のやうに二人共黙り込んで煙草ばかり吸つてゐると、入口の間で上靴を脱ぐ音がしたので主人が歸つたのかと思つてゐると、やがて戸が少し開いて、その間から頭が覗いたが、しかしそれはネツダーノフの頭ではなかつた。

その頭はぐるりと室の中を見廻して、何やら背いて獨りで微笑んで、さてそれ

から小さな胴體と跛を引く氣味のある足と共に室の中に這入つて來た。室の中の二人は頭を見てすぐそれが誰であるか分つたので、『ふん、彼奴か！』と心の中では言つたでもあらうと思はれるほどの、何といふ譯でもない輕蔑の表情を顔に表した。二人は一言言葉（こと）をかけるでもなく、立ち上らうともしなかつたが、この應對は新しく這入つて來た客をまごつかすどころか、反つてある満足を彼に與へたやうにさへ思はれた。

『こいつあ案外でしたな！二部合唱といふ譯ですか？なぜ三部合唱ではないのです？そして第一のテノルは何處に行きました？』といふやうなことを言つて、その客は這入つて來た。しかしオストロデューモフもマシユリナも眞面目に對手にはならず、彼がマシユリナの名前と父稱（註、イワンは名前にしてイワーノヴィッチは父稱といふが如し、凡て知人になる時、先方の名前と父稱を訊れるのが禮であるイワン、イワーノヴィッチと並べて呼んで、會話の間に對手の名を呼ぶ時に用ふ、

我邦の『さん付』にして呼ぶに同じ）を訊れると、

『それをお訊れになる必要はありませんまい、あなたは私の苗字を知つてゐりつしやる、それで澤山です。それからまあ、なんといふお訊れなのでせう！ご氣嫌は如何ですかつて！ごらんを通り私はかうして生きてゐますよ。』
それから彼がそれでは談話をするのに困るからと言ふと、

『えい、誰があなたに私と談話をして下さるやうに頼みましたのですか？』とマシユリナが言つた。

彼はまるで息が塞つたかのやうにして、神經質的に笑ひ出した。『いゝ加減に許して戴いて、さあお手を頂きませう。』

そして彼が手を差し延べると、マシユリナは陰鬱に彼を見たが、それでも手だけは出した。そして『是非私の名前があなたにご入用でしたら、フエックラと申します。』といふと、『それから私がピメンです。』とオストロデューモフがパスで附

け加へた。

『いやどうもご丁寧に恐れ入ります……ではフェックラさんに、そちらのピメンさん、何故あなたの方お二人は私にそんなによそくしくなさるのでせうね、この通り私は……』

と、オストロデューモフがそれを遮つて、

『マシユリナはかう思つてゐるのでせう、あなたは何事にもその可笑な側ばかりを見てゐらつしやる、従つてどうもあなたを信用することが出来ない……いやマシユリナばかりではないが……』といふと、彼は急に踵で向ひ直つて、『いえ、私はいつも笑つてばかりはゐませんよ！ 私は決して氣輕な人間ではない。これをごらん下さい。』

オストロデューモフは彼の顔を見た——實のところ、彼が笑つてゐない時、彼が黙つてゐる時には、遺瀨ないやうな、ひどく物に駭いたやうな表情をしてゐ

た——そして一度彼が口を開くと、忽ち彼の顔は、いかにも飄輕さうに、時には意地悪いやうにさへ見えて來た。しかしオストロデューモフは何とも言はなかつた。

彼は又マシユリナの方に向き直つて言つた。

『ご研究の方はどうです？ 何しろ無經驗な公民を初めて浮世に連れ出してやるのですから、仲々骨でせうな。』

『なあに、なんでもありません、たゞね、その者があなたよりも長が高くなければ。』とマシユリナが答へた——彼女はその時ちようど産婆の試験に通つたところであつた——そして得意さうにニヤリと笑つた。一年半ばかり以前に彼女は南口シヤの自分の生れた貧乏な貴族の家を捨て、六留持つて都に出て來た。そして産婆學校に入學して、不斷の努力で望みの免狀を贏ち得たのである。彼女は處女であつた……非常に純潔な處女であつた。讀者の中には否定家があつて、己で

に述べて置いた彼女の外貌のことを思ひ出して、いや格別驚かないよ！と仰有るかも知れない。が、我々はかう言ふだけの價值があると思ふ——驚くべき珍しいことだ！

マシュリナの返事を聽いて、彼は又笑ひ出したが、『だが我々の主人は一體どうしたといふんだらう？』と言つて話題を換えた。彼は自分の長の低いこと、容貌の醜いことを忘れることは出来なかつた。彼は恐しく女が好であるために、彼にはそれが一層苦痛であつた。生れの卑しいこと社會上に何等の地位もないことなどは、彼の容貌の醜いといふ意識に比べれば何でもない程に、彼は女に好れるためには如何なる物でも惜しまなかつたであらう。彼はパークリンと言つて、町人の息子であつた。彼の父は代言人であつたが、地面家作の周旋其他色々のことをして一代の中に可成の資産を作つたのであるが、晩年になつて大酒を初めて、死んだ時には何にも残つてゐなかつた。息子のパークリンは（彼の名はシーラで、

つまりシーラ・サムソノフと呼ばれてゐた。その名の意味はサムソンの力といふのであるが、それさへ彼は彼を嘲笑してつけた名であると思つてゐた。）商業學校に入學して、特にドイツ語は大變よく出来るやうになつた。それからどつちかと言へば苦勞の仕續けであつたが、ある商館に年給千五百圓で雇はれて、その金で自分ばかりでなく彼の病身の伯母と僕背の妹とを養つてゐた。この話のあつた時彼は二十八で、大學生や青年の間に大勢の友人があり、恐ろしく汚いことを平氣で言つたり、氣輕な悪口や偏頗ではあるが實際に深く研究した學識でみんなに愛されてゐた。が時々彼等の物笑ひの種にされることもあつた。ある時學生の會があつて、それに少し遅れてパークリンが會場に入つて来て、遅刻の詫びをしようとすると、何處かの隅から『憐れなり、パークリー怖れてありき。』と誰かが歌ひ出したので、一度に會衆が笑ひ崩れた。彼がネツダーノフと近づきになつたのは、ほるギリシヤ料理店で、彼はそこに晩食を食ひに行つては、のべつやふらと大言

してゐた。そして彼が民衆政治主義になつた主なる原因は、ギリシヤ料理が彼の
肝臓を壊したからであると言つてゐた。

『だが我々の主人は何處へどうしたといふんだらう？』とパークリンは再び繰返
して言つた。『時々あの人は不氣嫌さうな顔をしてゐるやうだが、ひよつとしたら
戀をしてゐるのかも知れないさ。』

するとマシユリナが『あの人は書物を持つて圖書館に行つたばかりだ。戀をす
るやうな人ではない。』と云つて厭な顔をしたのを見て『ではあなたにはどうです
？』とパークリンは大方で口に出しかけたが、『實は大變な用事があるので私は是
非あの人に會ひたいのです。』と別に大聲で言つた。オストロデューモフが『それ
は我々の用事か？』と訊くと、『あるひはあなた方の用事であるかも知れない……
……つまり我々の共通の。』とパークリンは答へた。オストロデューモフはさうかし
らと思つたが、やがて、『こいつが何を言ふか知れたものか！ このめらく〜縋め

が！』と思つた。

『こんどこそあの人だ。』と不意にマシユリナが叫んだ——見れば戸口の方をじつ
と見定めた彼女の小さな醜い眼の中には、暗れやかな、深い、内心の思ひとても
いふやうなものが閃めいた。戸が開くと帽カステットを被つた、書物の包みを小脇こ脇に抱へた
年の頃ころ二十三ばかりの青年、ネツダーノフがはい入つて來た。

主あるじの歸宅きたく

自分の部屋に客があるのを見て、彼は閑際に立ち止り、一顧客の顔を眺め廻し
て、帽子を脱とり、書物をじかに床の上に置いて、黙つてまつすぐに寢臺のところ
まで行き、その一端に腰をかけた。波打つてゐる赤毛の栗色のために一層白く見
える彼の白い美しい顔は、不満と腹立たしさを現はしてゐた。それと見て、バ

「クリンが、『ロシアのハムレット！ 誰か君を悲しませるやうなことをしたのか？ それとも單なる憂鬱病か？』と訊くと、ネツダーノフは苛立たさうにしてから言つた。

『今日は君と呆けた警句の吐き合をしては居られない。』それから、探索や密告など息も塞るやうな都には一刻も居られぬ、』と言ふと、オストロデューモフが『あゝ、それで解つた、君が新聞に家庭教師の口を求める廣告を出したのはそのためなのか。』と唸るやうに言つた。で、ネツダーノフが、馬鹿者があつて、僕のやうなものでも雇つてくれれば大喜びで都を去る、と云ふと、マシユリナが、『けれども、あなたにはまづ此地で果さればならない義務がある。それはオストロデューモフが話す。』といつたから、ネツダーノフはオストロデューモフの方を見ると、彼は只ゴクリと咽喉を鳴したばかりで、『暫く待て、彼奴がぬるから。』といふ風に咳拂ひをした。

『いや、冗談はさて置き、實のところ何か氣持の悪いことを聞いて來たのか？』とパークリンがネツダーノフに訊れた、すると彼は今まで腰掛けてゐた寢臺の蒲團の上で下から突き上げられたやうに身を躍らせて言つた。

『君にはこれくらひ氣持の悪いことがあつても、まだ足りないんだね！ 僕は今圖書館で聞いて來た、バザーノフが拘引された。誰がバザーノフを賣るやうなことをしたらう、もう僕には分らん。』

『ネツダーノフ君、』とパークリンが口を開いた。『君が亢奮するのも無理ではない。けれども今どんな時代に住んでゐるといふことを忘れてはいけぬ。徒らに憂鬱に沈む場合ではなくて、悪魔をもまともに見ることが出来なければならぬ……バザーノフを賣つたのは彼の友人に違ひないさ。友人といふものはそんな事にかけては名人だ。例へば、僕に一人の友人があつて、僕のこと、僕の評判にも心配してくれてゐた。ある日僕のところへやつて來て曰くさ、『おハ馬鹿々々し

ぢやないか、世間では君が君の叔父を毒殺したと言ひ觸らしてゐる、それから又君をある家へ連れて行くと、君がいきなりその家の主婦に尻を向けて座つて、そのまゝ一晩ちう尻を向けてゐたので、その主婦の貴婦人は大變口惜しがつて大泣きに泣いたとき。よくそんな馬鹿げたことが眞面まがはで言へたものさ。」ところがその後一年ばかり経つてこの男と喧嘩した、すると、その絶交狀に曰くさ、「自分の叔父を毒殺した君！ 貴婦人に尻を向けて座つて、恬として恥ぢない君よ！ 云々。」友達とはこんなものだ……」

オストロデューモフはマシユリナと眼を見合して、

『ネツダーノフ君！』と彼は例の重々しいバスで突然聲を發した——彼は今初つてゐる無用な長談議を断ち切らうとして、かう呼びかけたらしかつた。『モスコウのワシリーさんから手紙が來た。』で自分とマシユリナと二人で出張しなければならぬが、についてはネツダーノフに旅費の調達を頼む、五十留は是非なくてはな

らないと言つた。

ネツダーノフはこの時窓の傍にゐたが、指先で窓硝子を叩きながら『今持つてないが、きつと間に合せる。その手紙を今持つてゐるか？』と訊くと、オストロデューモフが『持つてゐることは持つてゐるが、』といつて何か憚るやうな風をするので、パークリンが腹を立てた。

『諸君はなぜそんなに僕を除物にするのだらう？ よし僕が諸君のやつてゐる事に少しも同情がないとしても、僕は諸君を賣るやうな男ではない。』

『ついた過失といふこともあるから、それは分らぬ。』とオストロデューモフが口を挿む。

『故意にも過失にもです、そら、マシユリナさんが僕を見て笑つてゐらつしやる。しかし僕は……』

『私は笑つてなんかゐません。』とマシユリナがぶり／＼した。

『しかし僕は。』とパークリンは、それには構はず自分の話を續けた。『諸君には嗅ぎ分ける力がないと思ふ。人が笑ふと、もう諸君はその人を眞面目だと決めてしまふ。』

『ですが又さうぢやないのですか？』とマシユリナが言つた。

『今もさうだ。』とパークリンは更に一段の力を込めて急いで言ひ續けて、もう二度マシユリナに口を開かせないやうな意氣込であつた。

『今もさうだ、諸君は今金かねに困つてられる、そしてネツダーノフ君に持ち合せがない。して見れば僕に相談して下さつたつて差し支へありますまい。僕がその金を出しませう。』

するとネツダーノフは窓の外を見てゐたが急に振り返つた。『いや、何も君に頼む理由はない。月々の補助金の前拂ひをして貰つて、間に合はせる。それからオストロデユーモフ、手紙を見せ給へ。』

オストロデユーモフはちよつと四邊を見廻して、身を屈めて長靴の底から丁寧に疊んである手紙を取り出して、何故だかそれをフツと吹いて、ネツダーノフに渡した。ネツダーノフは読み終ると、マシユリナに渡し、マシユリナはパークリンが手を延してゐるにも係らず再びネツダーノフに返した。と、彼は一つ肩をすぼめて、パークリンに渡した。それからオストロデユーモフがそれを取り上げて、一週高くさし上げて、一座の人に見せるやうにして、マッチを擦ると、非常に烈しい黄硫いわらの香におひがした、それからみんな灰になるまで手紙を燃してしまふと、暖爐べんかの中へ捨てた。その後はみんながむづかしい顔をして黙り込んでゐるので、パークリンはこの沈黙を破る必要があると思つたので、『もし五十留がいけなければ、二十留でも三十留でもいい。祖國の祭壇に僕に供へさせてくれ給へ。』と言ふと、ネツダーノフは非常に腹を立てた——歸つて來た時からむしゃくしゃしてゐて、機會があれば爆發しようとしてゐた怒りがその機會を得たのであらう、非常に怒

つて、『決して他人の世話にはならない、金は僕が作る！』パークリンが、『さうか、しかし兄弟、君は革命家だが、平民主義者ではないやうだね。』といふと、『いつそのこと、貴族主義だと言ひ給へ。』と言つた。

『なるほど、ある程度までは貴族主義だ。』とパークリンが言ふと、ネヅダーノフは無理に笑つたやうに笑つて、

『君のつもりは、つまり僕が私生兒だといふのだらうが、それについては君が言つてくれなくても、一時も忘れたことはない。』

それを聞くとパークリンは呆きれて、

『さう他人の言ふことを一々悪い意味にばかり取らないでもよからう。君は今日はどうかしてゐるやうだ。』と言つて、それから、ある批評家の話を初めて、オストロデューモフとに議論をしかけたが、とかく、面白く進まないの（勝手にしろ、俺は歸らう！）と心の中で決めて、室を歸りさうにすると、不意に、人の這人つ

て来た氣配も訪れもなかつたのに、すぐ戸口のところで、『ネヅダーノフさんはぬらつしやいますか。』といふ上品な滑らかな聲がしたので、一同吃驚した。そして二度目の案内にネヅダーノフが、やつと『ぬます。』と返詞すると、やがて立派な服装の長の高い四十ぐらゐの品格のある紳士が這入つて来た。紳士が這入つて來ると一同は思はず立ち上つて迎へた。

貴族席

立派な服装をした紳士はネヅダーノフの傍に近いて、笑顔をもつてかう言つた。

『私は一昨日劇場で御目にかつて、御話まで伺つた者ですが覚えてゐて下さいませかしら。實は新聞であなたの廣告を見て、伺つたのですが、他の客人に御迷惑でなかつたら、そのことについて少しばかり御話が願ひたいと思ひます。』と言

つて客はマシユリナには頭を下げ、他の二人の方に鼠色のベルギイ製の手套を飾めた手を振つた。

『左様なら、ネツダーノフさん後で又伺ひます。』と言つてマシユリナが突然立ち上ると、オストロデユーモフも、『僕も、僕も又後で来る。』と言つて立ち上つた。それからマシユリナはネツダーノフの手を強く振つたばかりで誰にも會釋もせず立ち去る、オストロデユーモフは、むやみに長靴の音をさせて、『ふん、海狸の襟か！』と二度ばかり、言のやうに言つて出て往つた。客はパークリンも前の二人の例に倣ふであらうと見てゐると、彼にこの立派な客の來た時から妙な忍び笑を顔に湛えてゐたが、隅の方に退いて、そこに座を占めてしまつた。で客は椅子に腰掛けて、

『私はシビヤーギンといふ者です、多分御聞き及びでせうが。』と口を開いた……が、ネツダーノフがどうして彼と劇場で近附きになつたか、ますその次第を述

て置かねばなるまい。その時分、オストロフスキイの劇『他人の機に乗る勿れ』といふのをサドーフスキイがモスコウから來て演つてゐたので、ネツダーノフは大のサドーフスキイ崇拜家であつたから、朝のうち切符を買ひに行くと、ネツダーノフの後から來た男が、彼の肩越しに三留札を一枚出して、『この男は釣銭が要るのたらうが、私は一等席だから先にくれ。』と言つた。ネツダーノフはひどく癢に觸つたので『いや、俺は一等席だ！』と言つて一等の切符を買つてしまつた。その晩一等席に入つてみると、自分の泥靴や手套のない手がひどく恥しいほどに、右も左も高官貴紳で、彼はその廣い氣持のいい安樂椅子の上で、身動きも出來ないやうに感じた、と自分の左席の何の紀章もつけてない紳士が幕合に、彼を「新時代の代表者」として劇に對する彼の意見を聞いたのが初りで、それから分け隔てなく一般の問題についての彼の意見を聞いてゐた。この紳士が今日訪れて來た、シビヤーギンといふ一等官で、彼はネツダーノフに別れてから劇場の入口で、馬

車を待つてゐると、彼の友人の待従副長G公爵がやつて来て、『下から君を見てゐたが、さつき話してゐた男の身分を知つてゐるか?』と訊れた。

『いや一向に知らないが、一體誰か?』と言ふと、『あれは父親の私生兒で、つまり私とは兄弟だ。親父は出来ようとは思はなかつたといふので、ネッダーノフ、つまり「案外な」といふ名前をつけたのだ。けれども親父はよく教育してやつたので、ながくの智者でせう。しかしこの節は妙な風になつて、共和黨になつてゐるので家へ寄せつけないのです。どうもしかたがない!』とフランス話で附け足して『いや、あいつのことは後で詳しく。』と言つて挨拶をして出て来た。その翌日シビヤーギンは新聞でネッダーノフの廣告を讀んで、面會に来たのであつた。

『私はシビヤーギンといふものです。』と彼はネッダーノフと相對して座つた時に言つた。『私共は夏と秋の大半とを、エス縣の中心市から四哩ばかり離れた持村の別荘に往つて暮らすことになつてゐます。ついでには兒子こどもに新聞に出された通りに

國語と歴史とを教へて下さいませんか……御承諾下さるならば、期限だけ決めて載きたい。』

それから話が決まると、ぐつと全身を前屈こむみに屈めて、親しげにネッダーノフの膝に指先を觸れながら、

『月給ですが、紳士の間ではこんな問題はなんでもない。月百留差し上げますが如何でせう。旅費は無論往復とも私の負擔として。』と言つた。それから黒エナメル細工の銀側の手帳を外套のポケットから取り出し、その中から名刺を抽き出し、『明日十二時に御出下さい。これが私の住所です。では明日。』と言つて出て往かうとした時、ネッダーノフは急に彼を呼び留めて。

『失禮ですが、さつき劇場で私の名前を知つたといふお話でしたが、誰から御訊きでしたか?』

『なあに、あれはあなたの友人、いや多分御親戚でせうが、あのG公爵から。』

『では侍従副官の？』

『さうです。』

ネッダーノフは顔を赧して、口を開いた……しかし何にも言はなかつた。

買ひ切りの一等車

シビヤーギンが関を越へると、すぐさま、今まで隅に扣へてゐたパークリンが飛び出して来て、うまいつかまりどころの出来たことを祝した。ネッダーノフは『我々は民衆の中へ往きたいと思つてはゐるけれども、決して貴族といふ敵の中へ往かうとは願はない。』といふと、パークリンは、

『いやさうではあるまい、第一にゲーテのかう言ふ詩を思ひ出してくれ。』

詩人を理解せんと欲せば、

まづ詩人の郷土に行けよ……

僕に言はせればかうだ。

敵を知らんと欲せば

まづ敵地に入れよ……

第二に君は今「民衆の中に行く」と言つたが、それは千八百六十二年のポーランド人の『森』と同じことだ、民衆は森だ、暗黒だ。印度人はジュゲルノートといふ偶像の車輪の下に身を投じて死ぬと、極樂に行けると思つて喜んでゐるが、我々にもこの偶像のやうなものはあるが、我々はそれから何等の慰安をも得られない。所謂民衆はこのジュゲルノートだ。それから、あのオストロデューモフのやうな連中は正直であり、善良な男であるが、我々はあんな連中に望みを持つてはゐない、見給へ、あの裏打のある長靴、あれは智慧のある者の穿くものではない。』と言ふと、ネッダーノフは、

『いや、僕の前であの男の悪口を言ふのはよしてくれ、第一あの男が長靴を穿いてゐるのは安價であるがため、第二に、あの男は必要があれば直ちに生命を差し出すことが出来る、これはお互ひの出来ないことだらう。』と言つた。するとパークリンは自分の不具な足を指差して、

『これで戦争が出来るか?』と言つた。『しかし長く居すぎたやうだ、これからあの商店に行かねばならん、では左様なら!』と言つて行きかけたが、十留札をポケットから取り出して、卓の上に置き、

『とにかく、せめてこれだけでも僕の財布を黨のために役立たせてくれ。』と言ふと、ネズダーノフが黙つてゐたから、

『沈黙は承諾なりだ、ありがたう。』と嬉しきうに言つて、やがて姿を消した。

ネズダーノフは一人になつた……彼は硝子越しに暗い狭い下の中庭スコッチをじつと見つめてゐた。そこには夏の太陽の光線さへ落ちて來なかつた。そして彼の顔も

陰鬱に見えた。

ネズダーノフは前にも述べた通り、前代のG公爵といふ富祐な陸軍中將と娘の家庭教師のナスチンといふ美しい娘との間に出來た息子で、母親のナスチンは彼が生れた日に死んだ。本人の希望は法科大學に入りたかつたのであるが、父は虚無黨になられてはといふ心配があつたので、歴史と哲學とを學ばせた。元々もとく貴族の血を受けた彼は容貌といひ、性質といひ、上品なところがあつて、彼を貴族だと言つたパークリンの言葉は誤つてゐなかつた。小供の頃から虚偽の境遇に置かれた彼の性質には色々の矛盾があつた。彼は悪徳か何かのやうに自分の純潔と臆病とを恥ぢて、理想を嘲笑しようとした。彼に「美學」を學ばせたといふ理由で彼は父に反抗し、尙更社會上政治上の問題に熱中して見せた。しかし彼の美を愛する性癖は如何ともすることが出來ない、彼は人に隠れて藝術から喜びを得ようとした、そして彼は自分で詩を作りまでした。しかし自作の詩を書き散した手帳はい

つも用心深く抽出の奥にしまつて置くので、ホテルブルグの友人たちで、彼の詩
を作ることを知つてゐるのはたゞパークリン一人であつた。それは彼からその話
を聞いたのではなく自分の鋭敏な直覺力で「はてなと思つた」のであつた。

今ネヅダーノフは突然自分の前に來た旅のことや、都を去ることなどを考へて
ゐた。そして都には置き忘れて行くやうな氣持のするものはなんにもなく、又、
秋には歸つて來るのにも係らず、何やら物恐しい氣分になつて、彼はその憂悶を
如何ともすることは出来なかつた……で、いつの間にか終ひに彼はそれを言葉
に言ひ表はさうと努めてゐるのに氣がついて、

『チエツ！ 俺はもう詩を作らうとしてゐるのではないか!?』と叫んだ。

けれども、いつの間にか、彼は椅子に身を埋めて、口の中で何やら言ひながら
髪を掻き上げたり、吸取紙で抑へたり、消し散しながら一行一行と書き記して行
つてゐた。と、戸が少し開いてマシユリナの顔が覗いた。彼女は暫く熱心に彼の

様子を眺めてゐたが、やがて首を左右に振つて後退りをしようとする。その瞬
間にネヅダーノフが頭を擡げた。そして『あゝあなたか！』と叫ぶと同時に、手
帳を机の抽出に投げ込んだ。マシユリナはさつき金の工面を頼んで置いたので、
それが何時出来るか聞いてくれと、オストロデューモフに頼まれたから訪ねた
と言つた。それから、翌日の二時まで金が出来ると、ネヅダーノフが言ふと、
では『自分は黨の命令でモスコウに行くから、此後いつ會へるか。又再會の機會
があるかどうかそれさへ疑問だから暇乞ひに來ました』とマシユリナが附け加へ
た。

で、ネヅダーノフが彼女のかぢかんだ赤い手を握つて、

『しかし、私も、さつきあなたが會つた紳士に雇はれてエス懸く。』と言ふと、

『エス縣の中央市に近いのですつて？ではもう一度御目にかかれるかも知れませ
んね。』と言つて、彼女の顔にはいかにも嬉しさうな微笑が浮んだ。それから深い

息を漏らして、ネツダーノフの名を呼んだから、彼が何かと訊くと、彼女は急に氣を換えて、

『何でもありません、ではこれでお別れです、いゝえ何でもありません。』と言つて、再び彼の手を握つて出て往つた。

『だが——とネツダーノフはマシユリナが去つた後で思つた——ペテルブルグ廣しと雖も、あの女ほど俺のことを思つてくれるものはない……變な女だ！お陰で随分迷惑をした……だが、何もかもいゝ案配になつた！』

翌朝約の如くネツダーノフはシビヤギンの邸を訪れ、それから十日程立つと買切りの一等車の天鵝絨のソファに自由主義の政治家と並んで身を投げながらニコラエフスカヤ鐵道の動搖する線路の上をモスカウの方へ急いだ。

客 間 (一)

シビヤギンの田舎の別荘には、シビヤギンの九歳になる男の子と、夫人のウァレンチナ・ミハイロプナと、シビヤギンの妹の娘のマリヤンナ・ウイケンチエグナなどがゐた。シビヤギン家でのマリヤンナの境遇はあんまりいゝ方ではなかつた。彼女の父はポーランド出の伶俐な男で、將官の地位にまで進んだが、莫大な官金の斯取したために、シベリヤに流され、罪を免されて歸つて來たが、元の地位に歸ることも出來ずして貧乏の中で死んだ。母親も間もなく死んだので、他に兄弟のないマリヤンナは全く一人ばつちになつたのを、シビヤギンが引取つたのであるが、他人の制肘を受けないでやつて行かうといふ氣があるので、どうも叔母との仲が旨く行かなかつた。あまり美しいといふ方ではなかつたが、どこか

に強いしつかりしたところがあつた。ネツダーノフがこの別荘に着いた最初の晩、

晚餐の席で、この家の客のカロメーチエフといふペテルブルクの宮内省の若い高等官が来てゐて、色々の話の後で、シビヤギンが、幾分彼を嘲笑するやうに、

『カロメーチエフさん、農奴開放についてのあなたの心配は、お互の友人アレクセイ、イワーニツチ、トヴェリーチノフが千八百六十年に書いて、ペテルブルク中の客間を読み歩いた論文に似てゐますね。中でもあの、開放された農奴はきつと松火を持つて、ロシヤぢうを駆け廻るであらうといふ一句は殊によかつた。あの可愛らしいアレクセイ、イワーノヴィツチが、頬をふくらせ、眼を圓くして、無心の小兒のやうな小さな口で、『たいまつ！たいまつ！たいまつを持つて駆け廻る！』と言ふ時の有様は實によかつた。ところが農奴開放は行はれた……何處に松火を手にした農女農夫がゐます？』と言ふと、カロメーチエフが、

『いや、トヴェリーチノフの間違つた點はたゞ百姓でないといふまでで、炬火を

持つて愚民を煽動して歩いてゐる奴が他にある。』といふやうなことを言つた時に、ネツダーノフは、彼と斜對に座つてゐたマリヤナにその時まで殆んど氣もつかずにゐたが、急に彼女と目と目を見合した。そしてすぐさま、この陰鬱さうな娘と彼とは同じやうな信念を持つて居り、同じ陣地に立つてゐるのだと感じた。それからカロメーチエフのやうな頑冥な議論を黙つて聽いてるのは恥しことであり、卑怯なことだと思ふがどうだといふ風に彼女の方を眺めると、彼女の眼が、

『急ぐな、少し御待ち遊ばせ。』といふやうに見えた。

樺の林

五月も中旬を過ぎて、初夏の暑い日が來たある日のこと、ネツダーノフは歴史の授業を終へてから、庭續きの樺の材の中に散歩に來た。鼠色の菌輪で模様を出

した樺の幹は鈍い銀色の圓柱のやうに隙間もなく立ち並んでゐる。一とこゝろ、十五年ほど前に商人が伐り出したことのある林の一部は、今では一面にひこはえが生え伸びて、浅い、けれども濃密な日陰を作つてゐた。そこまで来てネヅダーノフが切株の一つに腰をかけて憩んでゐると、ふとこちらへ近づいて来る人の足音を聞いた。それは一人のではなく、草鞋や長靴の百姓や素足の百姓女のでもなく、二人の人が同じ歩調でそろそろと歩いて来るやうであつた。と、錆のある男の聲で

『それがあなたの最後の御言葉ですか？ どうしても？』と言ふ、と

『はい、どうしても！』と言ふ女の聲がした。はて聞き慣れた聲であるがと思ふ中に、林が若木の叢になつたところへ、マリヤンナが色の黒い男と一緒に現れた。二人はネヅダーノフを見ると駭いて立ち止つた、ネヅダーノフも切株から立ち上ることが出来ない程に驚いた。マリヤンナは髪の毛の根元まで禿くなつたが、す

ぐ厭な笑ひ方をした。その嘲笑は顔を赧めた自分をか、それともネヅダーノフを笑つたのであるか、どちらとも分らなかつた。やがて二人は顔を見合せると、そのまゝネヅダーノフに背を向けて黙つて、格別歩を早めるでもなく引き返して行つた。ネヅダーノフは半時間も経つて自分の部屋に歸つてゐると、鐘が鳴つたので客室に行く、森で會つた男がゐて、シビヤギンからシビヤギン夫人の兄、セルゲイ・ミハイローヴィツチ・マルケロフだと言つて紹介された。食時の時ネヅダーノフは、マリヤンナとマルケロフとに自然と目を惹かれた。二人は並んで坐つてゐるが、同じやうにうつむいて、きつく口を結び、殆んど怒つてゐるやうな顔をしてゐた。それからシビヤギン夫人とマルケロフとがどうして兄弟なのかネヅダーノフには不思議でならなかつた。二人はどこと言つて似てゐるところはなかつた、たゞ一つ顔色の浅黒い點は二人ともさうであるが、それとてもシビヤギン夫人の浅黒いのは反つてあの女の魅力の一つであつたが、兄の方の黒いのは、

ひどく上品な人々は「青銅色」と評するであらうが、ロシア人の眼にはどうしても「革ゲートル」としか思はれなかつた。

晚餐の後で、ネツダーノフが自分の部屋に引き下らうとして廊下に出ると、向ふからマリヤンナがやつて来て、手を急に振り動して彼を呼び止め、

『あなたは今日森の中で私とマルケルロフとがひどく違つたの見て、變だと御思ひでしたらう?』と言ふから、『少し妙だと思つた。』と答へると、『實はマルケルロフが私に結婚を申し込んだので、私はそれを断つたのです。私はこれだけあなたに申し上げて置きたい。其他について私のことをどう御思ひになりましたか、私は一向構ひません。』と言ひ捨て、どん／＼去つてしまつた。ネツダーノフはこの頼みもしない告白に少し面喰つて、自分の部室の窓側に座つて、『いや變な娘だ!……があの女は自分を他人が誤解してゐると思ふと凝然としてゐられない性分なのだあらう。いや變り者だなあ!』と思つてゐると、窓下の露臺で主人夫婦とカロメーチェフとが自分の噂をしてゐるのが手に取るやうに聞えて来る。

『私の鼻の力は恐しい、あいつは過激共和黨ですよ!』とカロメーチェフが断言した。『私がモスカウ總督の下にラヂスラスといふ格で働いてゐた時、この連中を嗅ぎ分ける力が非常に發達したので、例へば。』とモスカウの郊外で老人の非國教徒が百姓家の窓から大方で逃げ出さうとするところを、やつとその靴の踵を捕へたと云ふ話をして、『こいつめ、その間際まで澄して坐つてゐたんですから、圖々しいつたらない!あなたがたの新しい教師がこれだ!あなた方はあいつが先に禮をしないことにお氣がつきませんか?』

『でもあの人が先き禮をしなければならぬ譯はないでせう。反つて私はそんな點であの人が好まなからぬです。』とシビヤギン夫人が言つた。

『でも私はあいつが雇れてゐる家の客であつて見れば目上の者だから、あいつの方から先きに禮をするのが當然です。いづれどうするか見て居れ、一つ異つた聲

で歌はして見せるから……さそい、氣味だらうな！』

『糞喰へ！陰辨慶め！』かうネツダーノフが上から殆んど怒鳴らうとすると、いや驚いたことには彼の室の戸がすつと開いて、マルケロフがはい入つて來た。

二階の窓

マルケロフはつか／＼と彼の方へ進あいて來て、

『あなたがペテルブルクの大學生アレクセイ・ドミトリエフ・ネツダーノフですか？』と言ふから、ネツダーノフが『さうだ。』と答へると。

『では、領袖からの手紙を持つて來たから讀んでくれ。』と聲をひそめて言つた。

手紙は封が切つてあつたが半公式な廻章で、マルケロフは信賴すべき黨員であるから互に協力して黨のために盡出すやうにと書いてあつた。それから二人は色々

の話をしたが、『まだ話したいことがある、ちやうど明日は日曜日だからこれから自分の家まで來てくれないか。』とマルケロフが言つた。

『しかし明日は三時から一週間分の下稽古したげいこがあるから。』と言ふと、

『下稽古したげいこ！まるで俳優やくしやのやうだね。さういふ言葉を案出したのはきつと僕の妹だらう。しかし僕の馬は電物のやうに驅る、明日三時までには歸へすから今晚と明日の朝だけ僕の家に居給へと言ふので、二人は古風な心持のよいマルケロフの馬車で八哩ほど隔つたマルケロフの持村もちむらに行つた。

マルケロフは小さい地主ぢぬしで、砲兵學校を卒業して中尉になるとすぐ長官のドイツ人と喧嘩して退職して田舎に引込んだ。都にゐる時若い進歩主義の人々と交際してゐたので、ついには熱心な革命黨になつた。

馬車がとある白楊の木下こしたやみ閣を駈け抜けると、すぐ前に小さな地主邸があつた。月の平圓盤を背後にして立つてゐる低い家の前面には、燈火あかりの射した三つの窓が

くつきり眞四角に浮き出してゐるやうに見えた。廣く開け放たれた門は一度も閉ぢられたことがないかのやうに見えた。前庭の薄暗がりの中に、高く荷物を積んだ運搬車があつて、向ふ側に白い備馬やとひうまが二頭にひまつけてあつた。同じく白い小犬が何處からか驅けて来て、吠えた、あどけない聲で吠え立てた。家の中では人々の立ち騒いでゐるのが見えた。馬車は玄關に着いた。で、やつとこさと馬車から身體を出して、抱えの鍛冶屋が例によつて一番工合の悪いところへ取りつけた降段せりだんを片方かたつばの足で探しながら、マルケロフがネツダーノフに言つた。

『さて我々は歸つた來た。君は、よく知つてはゐるが、大變案外な客に會うだらう、どうぞ入はいつてくれ給へ。』

その客といふのはマシユリナとオストロデユーモフとであつた。二人は黨の用事でこゝに滞在してゐるのだと言つた。その晩マルケロフはひどく激昂して早く革命を起さねばならないと主張したが、ネツダーノフは何故だかまだ時機が早い

と言つて反對した。それから黨員の話が出たりして朝の四時まで談じてゐた。

翌朝、マルケロフが農夫の覺さとりの悪いのへ耕作法を教へようとして徒らに疲勞してゐることなどを見て、ネツダーノフはマルケロフの馬車で歸つて來た。マシユリナが町に買物があるから一緒に乗せて行つてくれ、歸りは歩いてゝも百姓車でゝも歸るからと言つて、ネツダーノフと同乗した。彼女は馬車の中で黙つて煙草ばかり吸つてゐたが、町が近づいた時に、マルケロフの身の上を氣の毒がつかつた。ネツダーノフが『持村が旨く行かないからだらう』と言ふと、

『そんな意味ではない。あの人は不幸者です。あんな善よい人は世界中にないが、誰にもあんまり好すかれぬ。』と言つた。

『ではあなたは何か聞いたことがあるのか？』と訊ねると、『何にも聞いたことはないが、しかしそんなことは誰でも自分で感じるものです。では左様なら。』と言つて彼女は馬車を出て行つた。一時間も立つと馬車はシビヤーギンの邸についた。

ネツダーノフは気分があんまりよくなかつた……一夜眠らずに過した上に、あの論争、あの議論……

美しい顔が窓から出て、にこやかに彼に微笑みかけた……それはシビヤーギン夫人が彼の歸着を迎へたのであつた。

「何といふ美しい眼なんだらう！」かう彼は思つた。

並木路

その翌日授業の済んだ後で、ネツダーノフが玉突室にゐると、シビヤーギン夫人が入つて来て、彼を自分の居室へ呼んだ。この婦人は三十歳の美しい女で、自分には男に迷されることはないと思つてゐるので、情のある言葉や艶っぽい所作で男の心を動かさし、男が情を高めるのを見て喜ぶといふ性質があるので、又もネツダ

ーノフをその手で惹きつけやうとしたが、この手に乗せられて大分打ち解けかゝつてゐたネツダーノフは、夫人に自分の生立を聞かれて、自分が私生児であるといふことを恥ぢてゐたので、急に冷淡になつてしまつた。

玉突室でネツダーノフはマリヤンナに出會つた。彼女は夫人の居室に近い窓に背を向けて、しつかり両手を組み合せて立つてゐた。彼女の顔は殆んど暗いほどの物陰にあつたけれど、あの物怖ぢしない眼は、何やら審しげに、追求するやうに彼を眺めて居り、彼女の引緊つた口元はいかにも蔑んだやうな憐憫を表はしてゐたので、ネツダーノフは怪訝さうに歩みを止めた。

『あなたは何か僕に仰有ることもあるのですか？かう彼は思はず口に出した。するとマリヤンナは少し間を置いてかう答へた。

『いゝえ……ですが後でいつか御話したいと思ひます。』

で、ネツダーノフが、『いつかと言つてそれは何時のことだ？』と聞くと、よく

決める譯には行かないが、とにかく明日會ふことにしようと言つた。けれども二人は明日まで待たないで、その夕方、露臺の近くの並木路で會つた……

女の方から先きに彼に近づいて來た。『ネヅダーノフさん。』と彼女は早口な聲で談話を初めた。『あなたはすつかりヴァレンチナさんに迷はされてゐらつしやるのれ。』

彼女はその返事を待たないで、くるりと後向きになつた。そして並木路を向ふへ歩いて往つた。彼も彼女について歩いた。

『何故さうだと思ふのです？』彼は暫くしてからかう訊れた。

『さうでないのでせうか？すると今日はあの女の思惑が旨く行かなかつたと見える……私はヴァレンチナさんを悪んでゐることを隠さうとはしません。そしてあなたもそのことはよくご存じてゐらつしやる。ひよつとするとあなたには、私が片意地な女だと見えるかも知れません……ですがね……』

彼女は聲が急につまつた。彼女の顔は赤くなり、彼女の胸は烈しく震えた。……かうして胸が震えて來ると、それは常に何やら彼女はひどく腹を立てゝゐるのではないかと思はれるやうな様子を見るのであつた。

『あなたばかり思つてゐらつしやる。』と彼女は再び話し初めた。『なぜこのお嬢さんは俺にやたらとこんなことを話すのであらう？』そしてあなたは、私があの……マルケロフさんのことを話しました時もさうお思ひになつたに違ひありません。』

彼女は急に身を屈めて、小さな輩を摘み取り、それを半分に引き裂いて、はるか彼方へ投つた。

『それは違ひます、マリヤンナさん。』と彼は小さい聲で言つた。『私は、反つて、私はあなたが私の同感を受けて下さつたことだと思つてゐました。そしてさう思ふと私は非常に愉快でした。』

ネヅダーノフは全くの眞實を言はなかつた。彼が今言つたことは單に其場で彼が考へたことに過ぎなかつた。

マリヤンナは急に彼の方に振り返つた。今まで彼女は始終傍を向いてゐたのであつた。

『私があなたから同感を受ける理由はありません。』と彼女は何やら物思ひ耽つてもゐるかのやうにして小聲で言つた。『だつてあなたは私にとつて全くの他人でゐらつしやる。けれどあなたのお身の上、それから私の身の上とが大層似てゐます。あなたも私も二人共に同じやうに不幸だといふことが兩人を結びつけてゐるのです。』

『あなたが不幸?』とネヅダーノフが訊れた。

『するとあなたは、さうではないのですか?』とマリヤンナが答へた。

彼は何とも言はなかつた。

それからマリヤンナは自分の身の上を話し出して、シビヤーギン夫人は恩人の奥様であるけれども自分はどうも服従することは出来ない。といふのも自分が意地が悪いのかも知れないが、他人の麵麩は要するに苦いこと、自分は體のよい侮辱に堪えられない、そしてそれを顔色に出さないでゐることは出来ない、かう言ひ乍らも彼女は益々歩を早めてゐたが、不意にびつたり立ち止つた。

『伯母が私を家から出したいばかりに、私を……あの厭なカロメーチエフに押しつけやうとしてゐるのをご存じ?あの女には私がどんなことを考へてゐるかよく分つてゐるのです。——私はあの女の眼には虚無主義者なんです、そしてあの男は!私は無論あの男の氣に入る譯はありません、私は美人ではありませんもの。けれども私を賣りつけることは出来ます。それもやつぱり慈善ですもの!』

『ではなぜあなたは……』とネヅダーノフは何やら言ひかけたが、そのまゝ差し控へた。

マリヤンナはちらと彼を見た。

『なぜ私がマルケロフさんと結婚しなかつたか、かう仰有るのですか？さうなんですか？えい、しかしどうも仕方がないんですもの！あの方はいい人です。けれども私が悪いことをしたとは思ひません——私はあの方に愛がなかつたのですの』

それから彼女はシビヤギン夫人の批評を初めて、夫人は虚偽の團塊で、してゐることがまるで俳優のやうだ。人に美人だマドンナだと尊崇されるが學生の望みで、誰にでも情のある言葉をかけるが、實際は他人はどうならうと構はぬので、目の前で一本一本骨を摧かれてゐても、平氣で見えてゐるであらう。たゞ自分の都合のいい者だと、どんな手段でも用ひて釣り寄せて置くばかりだ。そしてネツダ・ノフの身の上を話したのも夫人で、自分の身の上から来る客ごとに話す、私の姪の父は官金を横領してシベリヤへ流された」など、それをさも同情したやう

な口振で話す、要するに夫人がどんなに上品に振舞つても、あの女はお喋りや、陸口家です、『あなたの大切なラファエルのモドンナは！』と言つた。でネツダ・ノフが、『なぜ私の大切な』といふのだと訊くと、マリヤンナは向ふむきになつて歩き出しながら、

『あなたはあの女と大層長い話をしてゐらつした。』と彼女は籠り聲で言つた。

……マリヤンナは黙つて先に立つて歩いた。林が盡きて目の前にはさしやかな芝生が開け、その中央ほどに枝の垂れた樺の老木がたつた一本立つて居り、その廻りに圓形のベンチが据ゑつけてあつた。二人はその上に座つた。芝生の全面から清々しい若草の香が立ち昇つて、松樹脂の匂で今もまだ締めつけられてゐる胸を軽くしてくれるやうであつた。

こゝでマリヤンナは話を換へて自分の關係してゐる學校のことや、ある孤兒の學童が誰よりも一番成績がよいといふ話をしたが、急に話題を換えたために彼女

自身も何だか様子が異つたやうに見えた——彼女の顔は蒼ざめ、心が少し安まつたやうだ。そして今まで言つたことが急に恥しくなつた。で、學校のことか、農民のことか、とにかく今までの調子を變へることが出来ることについて、ネツダーノフに「質問」を懸けたいやうな様子であつたが、彼にはそんな「質問」どころではなかつた。で、『マリヤンナさん。』と彼は呼びかけて、實は自分は今二人の間に起つたやうなことを少しも豫期してはゐなかつた。二人は急に親密になつた。で遠慮なしに言ふが、なるほどあなたはこの家いへに居ねづら辛むづいであらうが、見たところあなたの叔父さんは偏したところはあるけれど、同情おもひやりのある人だからあなたの心持ちも分つてゐるだらう？と訊くと、マリヤンナが、叔父は人間ではなくて、一個のお役人に過ぎない。それから自分はこの家では全く自由だ、夫人の口先くらゐなんとも思はぬと、言ふから、ネツダーノフが、『それでは……あなたは今まで仰つたことは』……と言ひかけた。すると彼女は、かう言つた——あなたは

いくら私を笑つてもいい。しかし私が不幸だといふのは、私自身が不幸であるためではないので、時々かう思ふことがある、つまり私はロシヤ中の壓制せられてゐる者、貧乏なもの、ために痛心してゐるのであらうと。私はそれらの人々のためには頭を碎くことも決して辭しないが、悲しい哉女の身でそれに他人の家の厄介者だから何の役にも立つことが出来ない、それで私は不幸だといふのである。父がシベリヤに流されてゐた時、私もシベリヤに往きたいと思つたが、それは父を思ふからではなく、自分の眼で流刑者の生活を見たいからであつた。父も母も死んで私が一人生残つてゐるが、それは私が何事にも誰のためにも役に立たないといふことによりほかには何の意義もない。』かう言つて彼女は顔を脊そむ向けたが、彼女の手がベンチの上に滑り落ちた。ネツダーノフはひどく同情して、そつとその手に觸れると、彼女は急にその手を引込めた——それは彼の動作が不躰ぶしちやうけたと思つたのではなく、彼女が彼の同情を求めたと思はれるのが厭いやだつたからであつ

た。

松林の枝の隙間から遠方にチラと女の衣が見えた。マリヤンナは嚴然まじつとなつて、『ごらんなさい、あなたのマドンナが謀者を出した。あの召婢女は私の後をつけて、私が誰と何處にゐたといふことを奥さんに申し上げるのです。夫人は私があなたと一緒にだといふことを察して、それは不都合なことであると思つたのでせう、殊にあなたと演じたあゝしたセンチメンタルな一幕の後ですから。それはさうともう歸らねばならない時です。』

二人が家に近づくと、シビヤーギン夫人は露臺の高處から遠眼鏡で二人を見てゐて、例の優しい微笑を満えて軽く頭を振つた。そしてシビヤーギンが齒の抜けた近處の客とカルタを引いてゐる客間に、開けてあつた硝子戸の入口から這入ると、聲高こゝろだかに一語一語區切りを切つて、

『戸外もとはほんとに賑々する！身體に毒だね！』と言つた。

客 間 (二)

二週間は別に變つたこともなく過ぎた。ネズダーノフは農民に近かうと努めたけれど、すぐ彼は、自分はたゞ彼等を觀察してゐるばかりで決して傳道してゐるのではないといふことに氣がついた。都會で育つた彼と村の人との間には彼の越えることの出来ない溝渠があつた。ふと彼は傳道事業の自分の職務は自由な舌唇で働くのではなく筆で働くことだと思つたが、さて紙に臨んで見ると、やつぱりそれも舌ですると同じく、不自然で虚飾に充ちてゐるやうに思はれ、いつのまにか詩になつたり、自分一個の感想になつたりしてゐた。そのことをマリヤンナに——彼にとつてはそれは異常な親密の表示であつたが——話すと、驚いたときにはマリヤンナがそれに少なからず同情を表した。この同情は勿論彼が詩人であると

いふことに對してゝはないので、彼が苦しんでゐる内心の疾病に對してゝあつた。 54

そして彼女もその疾病の苦しみを知つてゐた。マリヤンナも彼に劣らず藝術的なことを斥けてゐたが、彼女がマルケロフを愛さず、結婚しなかつた主な理由は、マルケロフにこの藝術的なことの跡だにないといふことではなかつたのであらうか？マリヤンナはこの事については獨り心の内でも認めることを肯じないであらうが、我々の情緒の中で強烈なものは、自分ながら一番その存在の凝はれる秘密な心なのであらう。

ネズダーノフは自分の無爲に不満を抱き、口には痛烈な自責の聲が絶えなかつたが、何處とも知れぬ極めて深い心の底には、言ひ知らぬ幸福と平和との微妙な感じが揺いてゐた。静かな田園、新鮮な空氣、夏と滋養の多い食事と、殊に安逸な生活の結果であつたが、又は初めて若い女の精神に觸れてその甘さを味つたためであつたか、それはどちらとも言ひ難いが、彼が友人のシリんに漏した彼の不

満は真心からではあつたが、要するに彼の心は輕かつた。しかしかうした彼の心の状態はある日不意に外から打ち壊されてしまつた。その日の朝彼はモスカウの黨の領袖から、次回の指命を受ける間にこの地方のある工場の監督をしてゐるソローミンとあるガルシユキンといふ商人とに近付きになつて聯絡をつけ置くてやうにといふ命令を受けて、自分の無爲を叱責されたやうに思ひ、今までは言葉の上で沸き立つてゐた彼の苦悶が、再び彼の心の底から起つて來た。その日の晩餐の席で彼は堪りかたで例のカロメーチエフと大爭論を初め、シビヤギンの仲裁でやつと收まりはつたが二人は怒つたまゝで別れた。その席上マリヤンナは一圖に眼を皿の上に凝らして、ネズダーノフの言葉で呼び起された同情を顔に表はすまいとしてゐたが、それは卑怯なためではなくて、シビヤギン夫人に自分の心を見せまいとしたしめであつた。目を伏せてゐても、どれほど鋭い凝然と見つめたシビヤギン夫人の視線が彼女の上に注がれてゐたかを感じてゐた。實際夫

人は彼女とネズダーノフとの上に眼を凝らしてゐたので、ネズダーノフの不意な激昂は最初ひどくこの賢い貴婦人を案外させた。が、と、やがて彼女は胸の中が明くなつたやうな気がした。そして『ア！』と思はず叫んだ程であつた。つい今しがたまで彼女の掌中に落ちてゐたネズダーノフがいつのまにか彼女に脊を向けてゐたのに急に気がついた。

『これは何か起つたに違ひない……はて、マリヤンナが何ぞしたのではないか……あゝ、無論マリヤンナだ……あの男は彼女の氣に適つてゐる、……そしてあの男も……』

『これはなんとかしなければならぬ。』かう彼女は自分の思ひ廻しを結んだ。一人この一幕に大満足であつたのはシビヤーギンであつた。彼は起きかゝつた暴風を鎮める自分の雄辯の力を示す機會を得たのであつた。……彼はラテン語を知つてゐて、ヴァザルの Quos ego (我は汝を!)には些少の興味を持つてゐた。

意識的に彼は自分をネプチューンに比したのではなかつたが、どこやらよく似たことのやうにネプチューンのことを想ひ出したのであつた。

空 部 屋

その夜十時頃、客間ではみんな骨牌に夢中になつてゐる、一人シビヤーギン夫人がマリヤンナのぬないのに氣がついて、『マリヤンナさんは?』と一遍はロシヤ語で、次にフランス語で、それも誰に向つて言ふでもなく、全く我々がひどく驚いた時よくやるやうに、壁の方に向ひて尋ねたが、自分もすぐ骨牌に夢中になつてしまつた。ネズダーノフは誰の眼にも觸れたくないで、自分の部屋に引き籠つてゐたが、マリヤンナ一人には會ひたく、もし自分が彼女の部屋の戸を叩いたら彼女は怒るだらうかと考へたが、ふと、彼女も彼と話したくてゐるのではないか

といふ氣がした。

ネズダーノフは部屋の中を何遍か歩き廻つてゐたが、つと廊下に出て、全體の家の最上層を眞二つに仕切つてゐる大廊下の一番端にあるマリヤンナの部屋の戸口まで行つて、靜かに戸を叩いた。返事がないので、もう一度叩いてそれから開くか開かないか驗べて見ると、戸には錠が下りてゐた。しかし彼が自分の部屋に戻つて来て、やつと椅子に腰を下りたばかりのところへ、こんどは自分の部屋の戸がギーンと開いて、マリヤンナの聲がした。

『アレクセイさん、私のところへぬらつしたのは、あなた？』

彼はすぐさま立ち上つて廊下に駆け出た。マリヤンナは戸の前に立つてゐた、手には蠟燭を持ち、顔が蒼かつた、凝然としてゐた。

『えい……僕です……』かう彼は囁いた。

『いらつしやい。』と彼女は答へて、そのまゝ廊下を歩いて行つたが、端まで行

かないうちに立ち止つて、長の低い戸を手で押した。ネズダーノフは小さな殆んど空虚な部屋を見た。『こゝに入つた方がようござんす。こゝだと誰も邪魔をするものはありません。』ネズダーノフは言はるゝがまゝに入つた。マリヤンナは蠟燭を窓臺の上に立て、置いて、ネズダーノフの方に向き直つた。

『なぜあなたが私に會ひたいと思ひになつたか、自分にもよく解つてゐます。』と彼女は話し始めた。『あなたはこの家にあることが苦しいのでせう、それは私もさうです。』

で、ネズダーノフは、『さうです、僕はあなたに會ひたいと思つたが、しかしあなたと近付になつてからは決してこの家にあるのが苦しいとは思はない。』

『マリヤンナが、まあうれしいこと、しかし今晚の客間のやうなことがあつてはこゝに居らうとなさるまい、と言ふと』この家で自分を置くまいとは思ふが、決して自分から出て行くやうなことはしない、それはあなたがゐるからである。

「マリヤンナは頭を下げて、少し部部の奥の方へ身を引いた。」その上』と彼は言葉が続けて、『實はあなたの知らないことで、こゝにゐなければならぬ事情がある。で、僕はみんなそれをあなたに話してしまひたい、いやさうしなければならぬやうな氣がする。』と言つて彼は彼女の方へ足を踏み出し、彼女の手を取つたが、彼女はそれを拂はうとせず、たゞ彼の顔に見入つてゐた。それからネズグーノフは非常な昂奮と自分ながら驚くほどの雄辯とで自分の計畫、シビヤーギンの申込を受けた顛末、友達のこと、のみならず誰にも打ち開けないはづの今朝受取つた手紙のこと、——かういふことを、今までマリヤンナに隠してゐたのが何かの罪であつたかのやうに、急いで話した。マリヤンナは熱心に耳を傾けてゐた、そして初めのほどは呆氣に取られてゐたが、この感情はまもなく消えた。感謝、自尊、心服、決斷、かういふもので彼女の精神は一杯になつた。彼女の顔と眼とは輝きだし、自由な片方の手をネズグーノフの手の上に重ねた——彼女の口より

つとりと開いてゐた……彼女は急に驚くほど美しくなつた！話を止めた時、ネズグーノフはしみじみその顔を見たが、なんだか今初めて見るやうな氣がして、『僕はみんな話してしまつて、いゝことをした。』と唇だけ動かしたほどに小さい聲で言ふと、『さうです、それはいゝことです』と彼女は思はず彼の調子を眞似たが、事實聲がなくなつてゐたのだ。』で、いゝことですといふ意味は、私はあなたの指揮の通りに、共同の事業に役に立ちたいと思ふ。行けと言はれれば何處へでも行く、私は常々からそれを望んでゐました……』と言つて彼女も黙つてしまつたが、もう一言で感動の涙が溢れ出るところであつた。廊下で忍びやかな足音がした。するとマリヤンナは急に身體を反して手を離し様子が一時に換つて、浮調子になつた。彼女の顔には何やら侮蔑したやうな、人もなげなところが見えた『今私たちが誰が視つてゐるか、私はちやんと知つてゐますよ。』と彼女は廊下まで無論聞えるほど、一言つゞはつきりと高聲で言つた。『シビヤーギン夫人が私た

ちのことを立聞たちきしてゐらつしやる……ですが私は一向差支さしつかへはない。」

それから、自分はどうかあなたがたの役に立つべきか、自分には解わからないからネズダーノフから指揮して貰もらいたい、と彼女が言ふと、『僕はマルケロフから今晚手紙を受取つたから、明日は一緒にソローミンに會あひに工場に行かればならない』と彼が言つた。で、『マルケロフはほんと立派な人だ、あの人こそほんとの相談相手である』と彼女が言ふ。『では僕のやうにですか？』と言ふと、彼女はネズダーノフの顔をまともに見て、『いゝえ、あなたのやうにはありません。』と言つたが急に顔を背そむけて、『今あなたが私にとつて、どんなもので、私が何を感じてゐますかお分りにならないでせう……』

ネズダーノフの心臓は烈しく波打つた。彼のまなざしは心ならず下さつた。宿るに家のない哀れな彼を愛したこの小女、彼に信頼し、彼に従つて同じ目的に進むことを辭やまない小女——彼女の名はマリヤンナ——はこの瞬間彼にとつては、

善と真とのあらゆるものの權化ごんけ、彼の知らない、母と姉妹と妻との女情の愛の權化ごんけであつた！

『で僕は明日行きます……そして歸つて來た時、私は……あなたに……』

(彼は急にマリヤンナをあなたと敬語で呼ぶのが變な工合になつた) 僕の所感や決議を話しよう。それからこれからは僕がしようとする事考へることは、みんな、みんな豫め知ることが出来る……お前は。』

『お、我友わがとも！』とマリヤンナは再び彼の手を取つた。『私も同じ約束してよ、あなたに！』(註○印は女の言葉なれば止むなく、あなたと譯したるも、敬稱にあらず愛稱なり)

しかしこの『お前に』は彼女はまるでこのほかには言ひ方がないといふふうに、いかにも自然に、輕々かろくと言つた。

それから彼女はネズダーノフに手紙を見せて貰もらひなどし、『まあ、あなたはこん

なに重い任務を任せられてゐらへしやる！」と言ふと、彼は返詞の換りにたゞ微笑んだが、『實に變だ、僕たちは互に愛を示した。互に愛してゐる。それのに、愛について一言と言はない！』と言つた。

『そんなこと！』とマリヤナは囁いたが、だしぬけに彼の首のところ飛びついて、頭を彼の肩に押しつけた……けれども二人は接吻はしなかつた。その理由は、それは形式的で、なんとなく厭らしいことだ——から二人は少くとも感じたからであつた。すぐ二人は両手でしつかと握手して別れた。

マリヤナは蠟燭を忘れたので、それを取りにさつきの部屋へ引き返して來たが、こゝで初めて、彼女に何やら不審しげなところのある氣持ちがして來た。彼女は蠟燭を消して、深い闇の中を、廊下を自分の部屋にさつさと戻つて來て、着物を脱ぎ、何故だかその中にゐると、幾分氣安いやうに思はれる闇の中で身體を横へた。

窓の傍に立ちて

それから五日ばかり経つと、ソローミンの工場にシビヤギンからの晚餐の招待状を持つて立派な馬車が彼を迎へに來た。ソローミンは斷りかけたが、別にネズダーノフからの「君は此方で大變入用な人だ、しかしそれはシビヤギン氏にとつてではない」といふ意味の添手紙があつたので、行くことに決めて、シビヤギンの迎への馬車に乗つた。シビヤギンは、ソローミンが工場監督として大變評判がいいので、旨く説き付けて自分の製紙場の監督になつて貰ひたかつたので、ソローミンが邸に着くと、非常に丁重にもてなし、工場の檢分を頼んだ。ソローミンは一目見るとすぐ、この工場には非常に無駄な費用が濫費されてゐるのに氣がつく、それをシビヤギンが顔色で見とつて、どんな風に改良したらいい

いかと訊ねると、彼は、何處といつて悪い點はないが、貴族には一體こんなことは適當しないことで、凡てが役人式だからいけないと言つた。それから本式の晩餐會の後で、シビヤーギンから今勤めてゐる工場を辭めて、自分の方へ来てくれと懇々頼まれたがすぐさまそれを斷つた。で、とにかく明日まで返事をしないでゐてくれ、それが格別ご迷惑でもなからうと、シビヤーギンが言ふので、それは格別迷惑なことでもないことに同意したが、彼は客間に返るとやつぱり自分の帽子を探してゐた。そこへ今迄話をする機會がなかつたネズダーノフが来て、今夜は宿ることにして自分の部室に来てくれ、大切な相談があるからと言つたので『ぢや、君のいゝやうに』と答へた。マリヤンナはその時客間の窓のところ立つてゐたが、彼女のソローミンに投げた感謝の眼光が彼を躊躇させたのであつた。マリヤンナは初めてソローミンを見た時にはどこか明瞭しない個性を缺いた男のやうに思つたが、その態度や話振を見てゐるうちにだん／＼彼に信頼するの念が

強くなつて来た。食事の時にはじめのほどはマリヤンナは『彼のことで數度ネズダーノフと眼を見合はせてゐたが、食事が終りに近いた時に彼女は、自分はいつのままにネズダーノフとソローミンを比較して見てゐる、そしてネズダーノフの方が割が悪いといふことに氣がついた容貌はネズダーノフの方が遙かに立派で心持がよかつたが、彼の顔は激しい心の動搖を表はしてゐるに反し、ソローミンはいさ／＼か退屈してゐるやうなところはあつたが、まるで自分の家にもゐるやうに打ち寛いでゐるやうに見えた。

『あゝこの人の忠告を求めればならない、この人はきつと有益なことを教へてくれるに違ひない。』かうマリヤンナは思つた。食事の後でネズダーノフが彼に近寄つたのは彼女の指圖であつた。

留守の間の卓の上へ

68

その夜の晩餐の後、主人と客とは夜の挨拶を取り交はして、各々寢に行つた後で、ソローミンはネズダーノフの部屋に入つて来て、ネズダーノフから、マリヤンナを伴つてシピヤーギンの家を立ち退くことになつてゐるといふ話を聞いてゐるところへ、マリヤンナが入つて来た。ソローミンはマリヤンナに、『もし革命運動に加はるつもりばかりならば、急いでこの家を出るに及ばない、革命はさう急に起るといふのではない。しかしもしこの家においてはネズダーノフと結婚が出来ないからといふ譯ならば、どのやうにも盡力をしませう。私はあなたも、それからネズダーノフ君をも一目見た時からまるで親身のものやうに思ひましたから。』と言ふと、ネズダーノフとマリヤンナは右より左より彼に近づいて彼の手を

取つた。

マリヤンナ、『革命は急に起らないにしても、その準備に仕事もあらうと思ひますから、あなたの指圖で何處へでも向けて下さい。』

ソローミン、『何處へ？』

マリヤンナ、『民衆の中へ……民衆の中でなくて、ほかに何處へ行くとところがありません！』

『森の中へ！』ネズダーノフは心の中でかう叫んだ……パークリンの言葉を思ひ出したのであつた。

ソローミン（凝然と彼女を見詰め）『あなたは民衆を知らうとなさるのですか？』

マリヤンナ『え、つまり、知るばかりでなく民衆のために働きたいのです。』
ソローミン『結構、私はあなたは民衆を知ることが出来る人だと、豫め言ふこと

69

が出来る。私はあなたにその民衆のために働けるやうにして上げませう。』だがネズダーノフ君、君も行くのか？……あの女について……その事のために？』

ネズダーノフ（急ぎ口早に）『無論そのつもりだ。』そして心の中でパークリンの言葉を繰り返した。（ジゲルノオト。あゝそれは動いて来る、巨大な車輪が。俺には車輪の軋り、轟きが聞えて来る。）

それからソローミンが兩人はまづこゝを出て何處に落ちつくのかと聞くと、それは二人ともないと言ふので、一まづソローミンの工場に逃げて行くことに決つたところで、マリヤンナは部屋を出ると、若い友達が二人きりになつた時、ソローミンが『ネズダーノフ君、あの娘のことを僕に話してくれ給へ。』それからネズダーノフが短い言葉で話してやると、

『ネズダーノフ君！』かう言つてソローミンはそのまゝ黙つてしまつたが、やがて、『ネズダーノフ君！君はあの少女を保護しなければならぬ。なぜなら……』

……何事かあれば……君には甚だ罪があることになる。お休み。』と言つて彼は去つた。

ネズダーノフは暫く部室の中央に立つてゐたが、『チエツ！考へないに越したことはない！』と呟いて、臍向けに寢臺の上に倒れた。

マリヤンナが自分の室に歸つて見ると、卓の上に次のやうな短い書付が載つてゐた。

『私はあなたが憐れです。あなたは自身を滅ぼします。迷の夢をお覺しなさい。あなたが今眼を閉つてどんな深淵に身を投じようとしてゐますか？ 誰のためには、何のために？』

部室の中には微かない香が立ち迷つてゐた。して見ればシビヤーギン夫人はこゝからたゞ今出て行つたばかりなのであらう。マリヤンナはそのすぐ下にかう書いた。『私とあなたとはどちらが憐むべきものであるか解らない。たゞ私は

あなたの位置には立ちたくないとは思つてゐます、Mより。」

隠れ家

従僕が駈けて来て、紳士と貴婦人らしい人が百姓馬車で来て、面會を求めてゐると言ふのを聞くと、ソローミンはすぐさま工場の門口に飛び出して往つて、客には二三度頭をちよいと下げたばかりで挨拶の言葉も取り交はさず、いきなり百姓の御者に前庭に馬車を引き入れるやうに命じた。そして馬車を自分の住家の方へ向けて置いて、彼はマリヤンナを抱き下すと、續いてネズダーノフが飛び下りた。二人は長い暗い廊下を通うて、建物の後側へ狭い曲つた階段を二階の方へ導かれた。そこには清潔と掃事のしてある小さな部室があつた。

『ここまで来ればもうめつかる氣遣ひはない。さう改めてご氣嫌よう！お嬢さ

ん、そしてネズダーノフ君！』

かうして二人はシビヤーギンの家を逃亡して、ソローミンの工場に匿はれることになつた。

ソローミンは二人の手を握つた——二人は外套も脱がずに凝然と立つてゐた、そして無言の、半ば驚いたやうな、半ば嬉しいやうな胸の動搖を持つて、自分の眞正面を眺めてゐた。

『どうしたといふんです』とソローミンが再び口を切つた。『まづ外套をお脱りなさい！それから荷物は何々ですか？』

マリヤンナはその時までやつぱり手に持つたまゝでゐた小さな包を見せた。

『私のはこれだけ。』

『僕のは靴と囊と馬車の中にある。僕が今すぐ……』

『いゝから凝然としてゐ給へ。』とソローミンは戸を開けて、『バーベル！』と暗い

廊下の方に向つて叫んだ。『駈けて往つてくれ、兄弟！馬車の中に鞆と蓑とがある、それを持つて来てくれ！』

それからマリヤンナが、誰にも見つからないで何とも旨く行いつた、自分はシビヤーギンに手紙を置いて来たこと、すぐに『民衆の中に行く』のであるから衣服は持つて来なかつた、しかし入用なものを買ふだけの金は持つて来た旨を告げると、『それはみんな後で取決めよう……が、』とソローミンは、其時ネズダーノフの荷物を持つて這つて来た男を指差して言つた。『これはパールと言つて、まあ僕の友人みたいなものだ、お紹介します、僕と同じやうに信用の置けるものだ。』それから彼の妻君はマチヤナと言つて、やつぱり信用していいものだ。とにかく用事があつたらこの二人に言つてくれ、自分は一順工場を見廻つて来るから、と言つて出て行つた。

マリヤンナとネズダーノフは二人きりになつた。彼女は彼の方へ駈け寄つた。

宋耕也

『私だけは新生活に入りました。たつた數日を過すためのこの貧しい部屋が、あの厭ふべき廣い邸よりどれだけ私にとつて愛らしく親しいかはあなたにはとても想像がつかないでせう！あなたも嬉しくつて？』

ネズダーノフは彼女の兩方の手を取つて、自分の胸に押しつけた。

『僕は幸福だ、マリヤンナ、この新しい生活をお前と共に初めるので、お前は僕を導いてくれる星だ、僕の頼りだ、僕の勇氣だ！』

『あゝ、アレヨーシヤ！ですちよつと待つて頂戴。私は少く身粧そじまをして、ネクタイを直さればなりません。私の部屋に行きますから、あなたはこゝにゐて下さい。私はすぐ……』

マリヤンナは奥の室に入つて戸を閉めたが、すぐさま戸を少く開けて頭だけ出し、『ソローミンはほんとによく氣のつく人だ！』それから又戸を閉めたが、かちりと錠の音が聞えた。

ネズダーノフは窓の傍そばに行つて、小さな庭を見下した……一本の老いた非常に
に老いた林檎の木なせが何故だか彼の特別な注意を惹いた。彼は身震ひして身體を伸
ばして、鞆ひらを開いた。そして何にも取り出さなかつた。彼は物思に沈んだ……
十五分も経つと、マリヤンナが生々としたさつぱりとした顔をして入はいつた來た
彼女はさもなく樂しさうに浮々して見えた。と、やがてタチャナがサモワールと
茶器と卷麵麩マクローニにクリームとを持つて這つて來た。

それからマリヤンナとタチャナとが友達になつて話をしてゐると、タチャナが
ちよつと言葉を切つて、

『あゝワシリーさん(ソローミンの名)がぬらつしやいました。あれはあの方の足
音です。あなたはある方にお訊ねなさい、あの方はすぐ決めて下さいますでせう
一番お宜しいやうに。』

ソローミンは部屋に這入つて來て、今工場主が來たから、今日は一日見舞ひに來

られないからそのことを知らせに來た、食事はこゝに運ばせるから、君方は庭に
出ないやうにし給へ。それからシビヤーギン家ではマリヤンナを探すだらうか？
と訊れた。マリヤンナは決して探さないと答へた、ネズダーノフは、きつと探す
と答へた。でソローミンは、しかしどちらにしても初めの中は用心しなければな
らない。追つてどうにでもなるから。』と言つた。それからネズダーノフがマルケ
ロフには知らせて置く必要がある、と言ふと、ソローミンが何故だと訊れたので
我々の仕事のために止むを得ない、彼には居所をいつでも知らせる約束をしたか
ら、それにあの男は決して口外しない、と言つた。

『では宜しい、パアヴェルを使ひにやらう』かうソローミンが言つた。

『それから僕の衣物を調へられるかしら？』とネズダーノフが訊れた。

『つまり扮装なりのことか？勿論心配はいらない、なに高が假面舞踏のことだ、高價
なものぢやない。さやうなら、ゆつくり休み給へ。タチャナ、行かう。』

マリヤンナとネズダーノフは再び二人きりになつた。

まづ二人は再び両手を握り合つたが、マリヤンナが、私はあなたの部屋を片づける手傳ひをしようと言つて、鞆や囊から色々なものを取り出した。ネズダーノフがその手傳ひをしよとすると、それを遮つて、自分一人である。『人に使はれることに慣れて置かれればなりませんから』と言つた。それから刷毛ブラッシュの裏で釘を打つたり長椅子の下に二足の靴をきちんと藏しまひ込むことまでした。それから短銃ピストルを見つけて。

『短銃ピストルですれ、』と彼女は不意に訊れた。『弾丸たまが込めてあつて？そんなものをあなたがあつてゐて、どうなさいます？』

『弾丸たまは込めてない……だがこちらへ寄よこして下さい。お前はどうする？と御訊れただけれど、僕たちの仲間である以上短銃を持つてゐない譯にはゆかない！』

彼女は聲を立て、笑つた、そして自分の仕事を續けて、品物を一つ一つ振つた

り、掌のちではいたりしながら。それから詩を書きつけてある手帳を両手で持つて自分の顔と水平にそれを捧げて、その端を越してネズダーノフを見ながら、彼女は、いつと笑つて言つた。

『手の透すいた時二人で一緒にみんな読みませうね！』

ネズダーノフが手帳を取り返さうとすると、彼女はそれを持つて自分の部室へ駆け込んだ。そして手ぶらで歸つて來た。それからネズダーノフの傍に腰かけたが、すぐさま立ち上つた。

『まだあなたは私の部屋にゐらつしやいませんのね。見たかなくつて？あなたのに劣りません。往らつしやい、見せてあげませう。』

ネズダーノフも立ち上つて、彼女の後について往つた。『彼女の』部屋は、(つまり彼女の言つた通りに言へばである)『彼の』部屋よりも少し狭かつたが、家具は何故なぜだかさつぱりとして居る、新しいやうでもあつた。窓には花を挿した硝子の

花瓶が載せてあり、隅には鐵の寢臺が据ゑてあつた。

二人は最初の室に歸つて来て、又話を初めた。「アレヨーシヤ！」とマリヤンナが呼びかけたから、『何だ？』と訊くと、『私は二人共少しきまりを悪がつてゐるやうに思ふ。若い者同志は、(とフランス語で新婚の夫婦と註譯して)新婚旅行の最初の日には、こんな感じを起すものなんであらう、彼等は幸福である……大變嬉しいのであるが、少しきまりが悪い。』と言つた。

ネズダーノフは微笑したが、それは苦笑であつた。

『マリヤンナ、僕らがお前の言ふその若い者同志でないことは、お前がよく知つてゐる。』

マリヤンナは自分の席を立ち上つて、彼の眞前に立つた。

『それはあなたのお心次第です』

『それはどういふ譯です？』

『アレヨーシヤ、正直な人としてあなたが私に仰有ればです——あなたは正直な人ですから、たゞ仰有つて下されば私は是れを信じます——あなたが私に、そのつまり、相手の生活を支配するやうな愛で……さうした愛だ私を愛すると仰有つて下されば、私はいつでもあなたのものですよ。』

ネズダーノフは赤くなつて、少し傍を向いた。

『僕がさうお前に言へば……』

『えい、その時こそ！でもあなたは今私にさう仰有ることが出来ないといふ自分で思つてゐらつしやる！あなたはほんとに正直な人ですのね。さあ、もつと大切なことをお話ししませう。』

『だつてさ、僕はお前を愛してゐるではないか、マリヤンナ？』

『私はそれを決して疑ひません……そして凝然と待つてゐます。ですが待つて頂戴、まだ書物卓の上が片づけてないですね……この紙包は何？』といふと、彼

かひどくうろたへて、

『それはさうと置いてくれ』と言ふから、彼女もびつくりした眉を上げて、

『秘密？、あなたに秘密があつて？』

で、ネズダーノフが肖像だと言ふと、『女の？……』と言ひながら、渡すと、受取方がまづかつたので手を迂り落ちて包みが開いた。それを見ると、マリヤンナが『あゝ、これは……私の肖像ですね！自分の肖像なら、私にそれを取る権利があります。』が言つて、ネズダーノフの手から引たくつて、『これ……あなたを描いた？』いゝや……僕ではない。』ではマルケロフ？』さうだよ、その通りだ。』『そして、どうしたあなたの手に入つたの？』『あの男が僕に呉れたんだ。』『何時？』

で、ネズダーノフはそれを詳しく話した。話が後に戻るが、それはかうである

——マリヤンナと、あの空虚の部屋で會つたあくる日、彼はシビヤーギンから二

日の暇を貰つて、マルケロフとソローミンを工場に訪れて、夜更けまで話し込みマルケロフの家まで歸つて、そこに一泊したことがあつた。あくる朝シビヤーギン夫人から使者が来てマルケロフは手紙を受取つたが、その中には、色々家庭のことを書き並べ、先日貸した書物を返してくれと書いてあり、ふと思ひ出したと言ふ風に、添書にして、彼の戀人であつたマリヤンナと、新しい家庭教師との戀のことが書いあり、自分はこれはふざけて言つてゐるのではない、自分の眼で見たことだと。しかしネズダーノフはまだ寢てゐて、それを知らなかつた。それからその日、町でパークリンやソローミンに會ひ、一緒にガルーシユキンと商人の家を訪れて、飲酒と激論に夜が更け、

ネズダーノフはマルケロフと一緒に馬車でマルケロフの家まで歸つて来る途中——空は低い雲で蔽はれ、まるで闇といふのではなく、行手の路の上の轍の跡は白く見えてゐたほどであつたが、右も左もしかとは見定めがたく、個々の物象

の輪廊は薄ぼんやりした大きな點になつて、それが一緒に融け合つてゐた。地界

標となつてゐる榎の木の一丈とした林を過ぎて、横路に入つた時に、馬車を驅る

のに一層難儀になつた。狭い岐路は時々全くなくなつてしまふこともあつた……

『路に迷はればいゝが』とその時まで、黙つてゐたネズダーノフが言ふと、マルケ
ロフが『不幸といふものは決して一日に二度來るものではないから路に迷ふこと
はない』で、ネズダーノフが、最初の不幸はなんだつたけ？と氣輕るに訊ねると『
それが何かと訊くのか？僕らは一日無駄にしてしまつた、それを君は何でもない
ことだといふのか？』で、ネズダーノフが、なるほど、吾々はあんなに酒を呑む
のではなかつた、ガルシーユキンの奴め、僕はまだ頭が痛い、と言ふと、『僕はガ
ルーシユキンのことを言ふのではない、彼奴はいくらにする、金を出したから、
僕らの訪問は無駄ではない。』そんなら、君はパークリンが僕らをあの現代離れ
のした十八世紀の家族の中に連れてゐたことか、と言ふと、『僕はそんな瑣事をか

れこれ思ふ男ではない。』と言つた。ネズダーノフが、『では何か？』と訊くと彼は
黙つてゐたが、今朝から何ともしれぬ妙に怒つてゐるところがあるのに氣がつい
た。で、暫く黙つてゐた後で、では今朝讀めと言つて僕に渡したキスリヤーコフ
の手紙に、感激してゐるのも知れないが、君、あれは馬鹿々々しいことだ、とネ
ズダーノフが言ふと、彼は突然怒り聲を振り上げてから言ひだした。『第一にその
手紙については、君とは意見がまるで違ふ、第二にキスリヤーコフは主義を信じ
主義に熱心だが、君はどうだ？今日パークリン見たいな尾無猿の言ふことの後に
ついて吾々は一人として自分を犠牲にすることは出来ないといふことに賛成した
のは一體誰か！しか僕は現に自分の信念のためには、この世の凡ての悦樂、戀の
甘さまで捨て顧みない者がゐるのを知つてゐる！だが、君がたには今日は……い
や、それどころではあるまいさ！』
『今日？なぜ今日と日に限るのだい？』

『おい、空呆ぞろぼろけたつて駄目だ！幸福しあわせなドンジヤン先生！』でマルケロフは馭者のゐることはまるで忘れてゐたが、幸しあはせと馭者は路のことにすつかり氣をとられて、後の二人の旦那方の争論にはあんまり注意を拂はなかつた。ネズダーノフが呆氣あつけにとられて、『君は何を言つてゐるのだ？僕にはさつぱり解わからない。』と言ふと、彼は、無理にした、腹立はらしさうに笑ひ出して、『僕の言ふことが分らないつて？ハッ、ハッ、ハッ。昨晚君が誰と戀を語つたか知つてゐるよ。君の美貌と甘言とに迷はされた人の名を知つてゐるよ』……夜の十時頃に自分の部屋へ君を引き入れた女を知つてゐるよ。』

でネズダーノフが『それで君の言ふことも、今朝からの君の煩悶も解つた。そして話が僕たちのことを探つて君に報告したかといふことも大抵推量がつく。』といふと、『そんなことは何の手柄にもならない。』とマルケロフはネズダーノフの言つてゐることに耳を傾けてないといふふうになり、わざと一語一語引き延のびして言

つた。『精神上か肉體上の異常の性質かな……いや、單に……私生兒どもの三拜九拜する幸福だ、きみ……だち見たいなもの！』とこの最後の一句は非常に口早くちばやに言つて、彼はそのまま黙つてしまつた。ネズダーノフは闇の中で顔が眞蒼まをになつたのを感じた（この侮辱は血で洗はなければならぬ。彼はマルケロフに飛びかゝつて、咽喉のどを引捕ひつかまうとする自分を危あやく制しながら、かう考へた。それから、やうやく路が分つて、村の小屋百姓家の灯がチラ／＼見え、犬の吠聲がするやうになつてから、ネズダーノフが『マルケロフ君、君もあゝいふ侮辱を君から受けた以上、僕が今晚君の家に宿とまることが出来ないことは、解るだらう、ついで僕には不愉快ではあるが餘儀よんどころなく君にお願ひするが家についてから、暫く馬車を僕に貸し給へ、僕は今晚町に適當な宿を取つて、翌朝早々君の期待してゐるはづの通告を君に送るから。』と言ふと、マルケルフはすぐには返事をしなかつたが、『ネズダーノフ！』と彼は突然低い絶望的な聲で呼びかけて『實に濟たまなかつ

た、僕はあんまり悲しかったので、前後知らずむやみなことを言つてしまった。しかし今晚は僕のところへ宿つてくれ給へ』で手を差し出すから、ネズダーノフも、ためらひながらその手を握り、十五分の後には彼は、この質朴な心のやさしい友人の部屋で又親密に話をし初めた。マルケロフは『さつき僕は戀まで捨て、自分の信念のために戦かうと言つたがそれは嘘だ、僕には今捨てるものはなんにもない、しかし君は愛し愛されることが出来、同時に主義のために盡すことが出来るのだから幸福だ。僕は若い時、立派な娘と戀に落ちたことがあるが、その女は僕に寢返り打つた。しかしマリヤンナは初めから正直に打ち明けて僕を欺いたのではなかつた。』それから『これを受取つてくれ給へ』と言つて、硝子の嵌つたマリヤンナの肖像を持つて來た。『ずつと前に僕が描いたので拙いことは拙いが、見給へ、似てゐるやうに思ふ。(それは鋭筆で横顔を描いたものでなるほど似てゐた。)これを受取つてくれ給へ、これが僕の最後の贈り物だ。』ネズダーノフはその

肖像を受取る権利はないやうに思つたが、マルケロフも彼の胸中を讀むことが出来たなら、恐く笑へるやうなことをしなかつたであらう、ネズダーノフは肖像を手にしてじつと考へてゐたが、今自分は一人の男の生命を掌に握つてゐるのだと言ふやうな氣がした、返へさうかとも思つたが、それは一層悪い侮辱だからと思ひ返して、受取つて置いたのである。

いつぞや旅から歸つて來て、マリヤンナと樺の林で會つた時、連中の話をした時に、このことも彼女に話したが、この肖像のことは言はず置いたので、彼女も知らなかつた。

今かうしてこの肖像を見てゐると、二人とも、もしこの席にマルケロフがゐたなら彼はこの肖像を要求することが出来るのだ』と考へた。

『あゝ、マルケロフさん、あの人はいい人であつた、今あの人は何處に居るので

せうか？』

『何處にゐるつて！無論、自分の家にだらう！』

『あなたは、あの人がこの肖像をあなたに渡した後も家にゐるとお思ひなされるの？』

そこへタチヤナがはい入つて来た。

それから、今晚はもう僅かな時間が、残つてゐるばかりだから、一晚だけ詩神に捧げよう、私が厳格な批評家になるから、と言つて、マリヤンナが進まぬネズダーノフに自作の詩を讀したりした後で、彼女はかう言つた。『私は百三十七圓持つてゐるが、あなたにはいくらあります？』ネズダーノフが『九十八圓ある。』と言ふと、『普通の人になつた私達として、私達はお金持ですれ。では明日まで！』彼女は去つた。が、やがて彼女の扉がほんの少し開いて、その隙間からまづ『お休みなさい！』それから、もつと低い聲で、『お休みなさい！』が聞えて来て、さうして鍵が錠前の中でかちりといつた。

ネズダーノフは長椅子に身を投げて、両手で顔を蔽うた……それから素早く起き上つて、扉に近づいた、そして叩いた。

『何かご用？』その中から聲がした。

『明日までではない、マリヤンナ……明日こそは！だ。』

『明日こそ。』かう低い聲が應へた。

翌日の朝早くネズダーノフ又マリヤンナの扉を叩いた。

『僕です。』と彼は「どなた」といふ彼女の間に答へて言つた。『ちよつと出て来ないか？』

『待つて下さい……今すぐ。』

出て来た彼女は、『まあ！』と言つて驚いた。一目見た時には彼女はネズダーノフとは氣がつかなかつた。彼はまるで行商人のやうな扮装を凝してゐた。

『どうしてセウ！』マリヤンナは叫んだ。『まあ、あなたは……ほんとにみつともない！（こゝで素早く彼を抱いて、もつと素早く彼に接吻した）なぞたゞの百姓服をお召しにならなかつたの？』

『僕もさう思つたんだが、パーヴェルの言ふには、百姓服だとすぐ化の皮が表はれる。がこの衣服は、あいつが言ふのですよ……まるで僕は性來からのやうで、この衣服ばかり着てゐたやうだつて。それはしかし僕の自尊心にはあんまり氣持のいいことではない。』

『で、あなたはすぐに着手なさるつもり？』

『まあやつて見る、どうもなんだが……』

『まあ！幸せ者だわねえ！』かうマリヤンナが言つた。

それからネズダーノフが、『バアヴェルは驚くべき男だ、ハイ、ハイと言ひつけ通りに働いてゐるが、心の中では人のことをいつも笑つてゐる。それが、ソローミ

ンのためとなら、水火を辭しない。』など、話してゐるところへ、タチヤナがマリヤンナの衣装を持つて來たので、女二人はマリヤンナの部屋に入つた、一人残つたネズダーノフが頻りと商人の身振を真似てゐると、ソローミンがやつて來て、『恐しく急性だ。しかし慣れて置くつまりでやるのなら、やつてもいい。しかしどちらにしる少し待つ必要がある。工場主はまだこゝに居て、今寢てゐる。』それから君は傳道書を持つてゐるやうだが、工場内では配つてくれるな。それは第一に君にとつて危険でもあり、第二にこゝでは着手されてゐるからその必要はない、學校や其他の施設もしてある。たゞ君は君の注意の及ぶかぎり用心して行動してくれ給へ、僕は君を止めようとはしない。』とソローミンが言つた。やがてマリヤンナは百姓女のやうな扮装に變つて入つて來たが、ネズダーノフとは反對に、百姓女の彼女は以前よりも一層若々しく美しく見えたのであつた。やがてどう思つたかネズダーノフはだしぬけに立ち上つて、

『僕は一つ行つて来る。何もかもひどくいゝ氣持だが、たゞ少し許り茶番めくれ。(それからソローミンに)安心し給へ、職工には觸らない。(次にマリヤンナに)何か話すやうなことが起つたら、歸つて来てすつかり話すから、さあ、お別れに握手しよう。』かう言つて、彼は茶も吞まずに出て行つた。タチヤナも出て行かうとするから、マリヤンナが、出て行かないで下さい。用があるから。』と言ふと、『すぐサモワールを持つて來ます。お連の方は茶も召さずに往らつしたが大したお急ぎのやうでしたれ、あなたは自分を罰する必要はない。先きは見えてゐる。』と言つて。タチヤナは出て行つた。ソローミンも立ち上つたが、マリヤンナは背向きに立つてゐた。彼女が大層長いこと黙つてゐたので、彼女はとうとう彼女の方に振り返ると、彼の顔、彼の目の中に常に異つた表情、何やら聞きたさうな、心配さうな、殆んど好奇的な表情の浮んでゐるのを見て、ひどく動揺して、顔を赧めた。ソローミンも顔色を見て取られたと思ふと、ひどく氣恥しくなつて、いつも

より大きい聲で、『あなたたちは愈々着手した。』と言ふと。マリヤンナが、『これが何の「着手」と言へるでせう？ネズダーノフが言つたやうに茶番か何かのやうに思はれて來た。』と言ふと、ソローミンは再び腰を下して、『着手』と言ふことは決して防禦壁を築いて、その上に旗を翻へし、共和政治萬歳といふことではない。田舎の女に物を教へるのも、病者に藥をやるのも着手だ。(それからマリヤンナがそれは尼さんの仕事だ、この着物を着た甲斐がない、と着てゐる着物を指さすから)あなたは自己を犠牲にするつもりであつたのでせうが、皮垢だらけな小供の頭を梳いてやるのも、普通の人には出來ない犠牲で大なる犠牲だ。あなたが鍋を洗つたり、雞の毛を筆つたりなさる間にあなたは國家を救ふのだ。(こゝでマリヤンナが、あなたは私を笑つてゐらつしやると言ふと)何の私があなたが笑へませう？ロシヤの婦人は男より有爲である。まづ生きてゐなければならぬ、これが一番大切なことだ。それからシビヤーギン家の様子を知りたくはないか、パーヴ

エルに一寸耳打ちすればいいのだ。それからネズグーノフと結婚するなら、これもパーヴェルが旨く取り計らうが、またその必要もないと思ふが、どうか？」と言つた。マリヤンナは『その必要はありません。』と答へた。それからソローミンがマリヤンナの部屋に通ずる戸口に行つたので、何を見てゐらつしやる？」と彼女が訊くと、『錠は掛りますか？』彼女は『はい。』と答へたが、目を上げてソローミンを見なかつた。ソローミンが部屋を出て去らうとすると、マリヤンナが、『あなたはいつも黙つてゐらつしやるのに、何故今日はいろく私に話をして下さつたのです？それがどんなにか私は嬉しかつたでせう！』

『何故ですつて？』ソローミンは大きな手で彼女の手を握りしめた。『何故ですつて？それはきつと私があなただを大變愛してゐますからでせう。さやうなら。』

夕方ネズグーノフが埃に塗れ疲れ切つて歸つて來た、長椅子に身を投げると、

マリヤンナはすぐ馳けよつて、

『さあ、様子を聞して下さい！』

すると彼は弱々しい聲でかう言つた。

『かく痛しからずば』

そは凡て可笑しかりしならんに』

『お前はかういふ詩を覚えてゐるか？僕の第一歩、この詩で遺憾なく説明される。いや可笑しいことの方が多いやうだ。僕が話しかけた者はみんな生活に不満でゐたが決してその不満な所以を取り除かうとは懲してゐない。四人の男に本をやらうとしたが一人はお寺の本かねえ？と言つたきり、受取らうともしない。一人は字が讀めないが、表紙に繪があるから小供にやると言つた。一人は初めは『ない、ない』と言つてゐたが、突然となりつけて、やつぱり受取らなかつた。

最後の一人は受取つて、しきりと禮を言つてゐたが、僕の言つたことなんな一言

も解らなかつたらう。』それから居酒屋でウオツカを飲んだ話などして、『僕のやうな藝術的な人間には實社會に觸れることは困難なのであらう。今思ひ出せば、きつと自分がいまくしく、痛しくなるだらう。』と言つた。でマリヤンナが言つた。『決して一人で考へさせるやうなことはしない。今日自分がタチャナとスープ鍋を立派に磨いたことを話ませう。夕飯を食べる中にも。』

マリヤンナはその通りにすることが出来た。彼女が自分の話を話してゐる間、ネズダーノフは彼女を厭かず見てゐたので、彼女は、なぜそんなに見るのだとなんども訊れたが、彼は黙つてゐた。

夕食の後、彼女は彼にスピルパーゲンの朗讀をして聞かしたが、その一頁も讀まないうちに、立ち上つて、マリヤンナの前に脆いた。彼女が立ち上ると、その腰のところを抱いて、熱烈な切々な言葉で言ひ出したが、彼女はこの突發的な抱擁に身を任して、靜かに、むしろ慈しむやうに上から彼を見下した。

『今日と昨日とのことを許してくれ、マリヤンナ、そして僕がお前の愛を受けるに足るやうになるまで待つてゐるともう一度言つてくれ。そして僕を許してくれ。』

『私はあなたに約束しました……それを換へるやうなことは出来ません。』

『あゝ、ありがたう、お休み。』

ネズダーノフは部屋を出た。マリヤンナは戸に錠を下して引き籠つた。

林檎の老木の下

『それから二週間ばかり経つたある日のこと、近邊の某地方で農民の間に暴動が起つたといふ通知があつた。それはきつとマルケロフがやつたのに違ひないからといふので、ネズダーノフが應援に行かうとすると、マリヤンナも是非一緒に行く

と言つて聽かない。そこへソローミンが来て、『ネズダーノフが行くといふのなら、あなたは反つてネズダーノフの足手纏ひになるばかりだから行かない方がよからう。ネズダーノフ君はたゞ様子を見て来るだけにし給へ。パアヴェルと一緒にやるから。』と言ふと、ネズダーノフが、

『あゝいゝとも、こゝにゐるものはみんな君の言ふ通りになる人だから、マリヤナを初め。』そして彼は出て行つた。すると暗い中からパアヴェルが飛び出して、彼より先きに驅けて行つた。

後に残つたソローミンが、マリヤナに、

『あなたはネズダーノフの最後の言葉を聞いたでせう。』と言ふと、マリヤナが、『え、あの人は私があの人の言ふことよりもあなたの言ふことに餘計に服従するのを氣に掛けてゐるのです。そしてそれは事實ですもの、私はあの人を愛してゐます、けれどもあなたに服従してゐます』と言つた。

それから、ソローミンが、『實に厭なことが起つた、マルケロフがもしこの暴動に關係があれば、彼はきつと死ぬる。』と言ふと、マリヤナは『死ぬる！』と呟くと急に悲しくなつてひとりで涙が頬を傳つた。『お、マルケロフさん！私はあの人が大變氣の毒だ。でもなぜあの人は勝利が獲られないと仰有るのですか、なぜきつと死ななくちやならないのですか？』

で、ソローミンが、『かういふ事業は、例へ成功するにしても、最初のものは、いつてもきつと死ぬるものだ。マルケロフのやうなやり方では、それが二番目でも、十番目でも、二十番目でもきつと死ぬる。』と言つた。では生きてゐる中にはその成功を見ることは出来ないか？と聞くと、それは勿論のことである、とても眼で見ることは出来ない、しかし心でそれを豫知することは別で、それなら出来る、と彼は答へた。ではソローミンもなぜ同じ途を歩いてゐるのかと訊くと、他に途がないからである。も少しはつきりと言へば自分もマルケロフと目的は一つ

であるが、取る途を異にするかと答へた。

『あゝ憐れなマルケロフさん！』とマリヤンナは悲しげに呟いた。するとソローミンが、『まだ何とも分らぬ、イギリスの諺に「死を説くな」といふことがあるが、ロシヤの「不幸到れば門を開け」といふよりも善い。前に嘆くのは無駄だ。』と言つて立ち上ると、マリヤンナは

『ではあなたが私に與へようとなさる場所は？とだしぬけに訊いたが、その時は涙はまだ頬に光つてゐたが、眼の中にはすでに悲しみの色はなかつた。

『あなたはそんなにこゝを急いで立たうとなさるのですか？』

『いえ、いえ、ただ私は役に立ちたいと思ひます。』

『マリヤンナ、あなたはこゝでも大變役に立つてゐます。我々を捨て、行かないで、も少し待つて下さい……』

そこへマシユリナが訪れて来て、ネズダーノフに手紙、ソローミンには傳言を

本部から持つて来たと言ひ、ソローミンに準備は出来てゐるかと聞くと、何の準備もしてないと言ふので、呆れて小さい眼を出来るだけ見張つたが、こゝには長く居られないから（彼女は黨用でセネバへ行く途中であつたが、ソローミンには打ち開けなかつた）早くネズダーノフに會つて、手紙を渡したいものだと言つてゐる中に、タチヤナが入つて来て、四五人他所の職工が来て騒いでゐるから来てくれと言つてソローミンを連れて行き、マシユリナはマリヤンナと差し向ひになつたところで、マリヤンナに、

『あなたがネズダーノフと一緒に家出をした娘さんか？』と訊いたから、マリヤンナは面喰つたが、それでも『はい。』と言ふと、『あの人が愛してゐるからはあなたはきつと善い人に違いないから握手を』兩女は握手をして、マリヤンナが『あなたはマルケロフに近頃會つたか』と訊くと、『會つたけれど、今は家にゐない、命じられたところへ住つてゐるから。』で、マリヤンナは溜息を漏して、

『ミス・マシユリナ、私はあの人のことが心配です。』と言ふと、マシユリナが、『第一に自分は、ミスではない、そんな禮義はみんな捨て、しまはればならない。第二に、あなたは自分のことも他人のことも氣違つてはならない。しかし自分のやうな醜いものにはやさしいことであるが、あなたのやうな美しい人には困難である。マルケロフが、手紙を渡すのは若い二人の幸福を全く破碎することになるから、手紙を持つて工場に行くと言つたが、自分もその方が嬉しいが、手紙はどうしたらよからう！』と言つた。マリヤンナは『渡すはづの手紙ならネズダーノフに渡さなければならぬ。しかしマルケロフは實に親切な人だ、あの人が死んだり、シベリヤへ流されるやうなことがあらうか？』と訊くと、マシユリナは、『しかしある人にとつては生活は甘いだらうが、ある人にとつてはむしろ苦い、マルケロフの生活も砂糖で出来ではぬないやうだ』と言つて暫く考へ、マリヤンナを見てゐたが、

『あなたは、ほんとに美しい、まるで小鳥のやうです……あなたは大變ネズダーノフを愛してゐるか？』と訊れた。マリヤンナが『はい』と答へると、『そんならあの人があなたを大變愛してゐるかとお訊ねする必要はない、それからネズダーノフが歸つたら、マシユリナが來てよろしく言つて行つたと傳へて下さい、それから手紙だが、私は何處へ入れたらう。』と探す振をして、素早く小さな紙切を口に入れて呑み込んでしまひ、『何處へか捨した、困つたことをした。とう／＼マルケロフの言つた通りになつた。それでは歸ります。しかしこゝにゐるのは危険だから、二人で早く他所へ行きなさい。』と言ひ残して出て行つた。

マリヤンナは一人取り残されたやうな氣がして、マルケロフが手紙を持つて行くと言つたこと、マシユリナが自分に手紙を渡さなかつたこと、それから自分を美しい、まるで小鳥だと言つたことを思ひ出して、なぜ自分を人形だと言はなかつたかと、まるで自分一人が人々から除物のけものにされてゐるやうに感じあのマシユ

リナといふ女は自分よりも餘計にネズダーノフを思つてゐること、それにしても自分はそんな犠牲を受ける権利があるかと自問し、ソローミンは出て行つたきりで、なか／＼歸つて來ぬがどうしたらうなどと考へに耽つてゐると、重たい二人の足音がした。それはパアヴェルがまるで死人のやうに泥酔したネズダーノフを扶けて歸つて來たのであつた。その譯はかうである——ネズダーフはパアヴェルと一緒に馬車に乗つて工場を出ると、非常に昂奮して、パアヴェルの制止も聽かず、道々農夫共に革命の必要を説き、自由のために戦へと怒鳴つてゐると、一人の無頼漢が出て來て、なるほどそれは尤もなことだから、酒を呑さうと言つて、居酒屋へ連れ込み、大きなコップで三杯も呑ませられると、彼は前後も知らず泥酔してしまつたので、パアヴェルが、いろ／＼謝まつて、身代金だと言つて農夫共が請求する五十錢ばかりの金を拂つて無事連れ歸つたのであつた。

ネズダーノフが寢てゐる中に、パークリンが訪れて來て、マルケロフは蜂起するやうに説いてゐた農夫共のために捕へられて、役人の手に引き渡され、ガルシーユキンといふ商人も捕へられたが、これは罪を免れようとして、同志の名をみんな白状してしまつたと言ひ、マルケロフの釋放方を彼の妹婿のシビヤーギンに頼みに行かうかと相談した。成否はとにかく悪いことではなからうといふことに決つた。それからパークリンが序でにマリヤンナ、ネズダーノフのことも頼まうかと云ふと、マリヤンナがネズダーノフをも代表して、それはきつぱり斷つてしまつた。そこへネズダーノフが起きて來たが、パークリンは勿々に挨拶して出て行つてしまつた。二人切りになつたところで、ネズダーノフは、マリヤンナに、『お前は夫とするだけの價值のないものと一緒になつたのであるから、ひどく氣の毒だ。今にも捕人が來れば、二人はソローミンの知つてゐる坊さんに頼んで結婚した上で、こゝを逃げるのであるが、自分と結婚することを残念とは思はないか？』と聞くと、彼女は『いつでも結婚する。』と言つた。で、『ソローマ人のやうに、義務の

觀念の強い女だ。』と思つた。

その晩十時頃にパークリンはシビヤーギン家を訪れて、マルケロフが拘引されたことを話すと、シビヤーギンは驚いたが、『いや親類でも謀叛人に組するとは出来ない、たゞ一應知事に面會して自分だけの説明をする必要があるから。』と言つて、パークリンを監禁同様に邸内に宿め、あくる朝早く二人は馬車で町の知事のところへ往つた。その途中、シビヤーギンはマルケロフの換りにネズダーノフを捕縛させるために、ネズダーノフも保護してやらねばならないかと言つて、釣り出しを掛けると、パークリンはつい乗せられて、『ネズダーノフとマリヤナはつい近邊のある大きな工場にゐる』といふことを喋ると、シビヤーギンは今まで二人が何處にゐるか知らなかつたが、ソローミンの工場にゐることを感づいて、まづ捕縛は出来ると思つて嬉んだ。

知事のところへ、シビヤーギンはマルケロフに會つて、『悔悟すれば赦罪のため』に盡力しよう』と言ふと、マルケロフは『自分を捕へた農夫に恨みはない、農民の方から近づいて來たのでなく、こちらからばかり進めにいつたからだ、例ひシベリヤに流されても政府にも恨みはない、政府は當然の防衛の途を取るのであるから。』と言つた。そして主義も正しいし黨の領袖の言つたことも正當であるが、たゞ自分の取つた方法が悪かつたので、失敗したのだと考へて、彼は平然としてゐた。

シビヤーギンは知事に向つて、『ネズダーノフといふ男が自分の姪を誘拐していつたが、この男は民衆煽動に關係のあることは分つてゐるから、捕縛してくれ。』と言つて、別室に監禁されてゐたパークリンを引き出し、『この男の證言によると、彼はソローミンの工場にゐると言つたので』パークリンはしきりに『自分は決してそんなことは言はない。』と言つたが、ネズダーノフを捕縛することに決つて、パークリンは放免された。

パークリンがシピヤーギンにマルケロフの赦免に盡力させたのは、一つには自分も革命黨の連中と一緒にゐたことがあるので、危険を感じたから、さうして置けばシピヤーギンが自分をも保護してくれるだらうと思つたのであつたが、自分は無關係で通つてしまひ、反つて友達の隠れ家を密告したことになつたのであつた。

その朝のことであつた。

マリヤンナがタチヤナのところへ行かうとして、ネヅダーノフの部屋を通ると彼は昨日のままの姿で非常に蒼い顔をしてゐたので、『あなたは眠らなかつたのか?』と聞くと、『自分は昨晚ソローミンがお前の部屋に入つたのを見てから、眠られなかつた……ソローミンがすぐ出て來たのは知つてゐる、そしてこれは決して嫉妬からではない。自分はなんだかソローミンとお前との邪魔をしてゐるやうな氣がする、そして、自分自身の邪魔をもしてゐるやうに思ふ……それは僕

の身體の中に二人の人間がゐて、互に生かすまいとしてゐる、双方死んでしまへばいいのである。よく考へると、僕は主義を信じてゐなかつた。たゞお前といふものゝ熱心に動かされ、お前の火で暖められてゐたばかりであつた。しかしお前は主義に確信を持つてゐるだらう?』と言ふと、マリヤンナが、『私は心底から主義を信じ、そのためには生命をも捧げて惜しまぬ。』と答へたので、『僕もその答を待つてゐた。すれば二人の間の繋ぎの糸は切れたのだと言つた。』マリヤンナは、黙つてゐた。ネヅダーノフは言葉をついで、『ソローミンも主義を信じてはゐないが、あの人はそれを信ずる必要はゐらない。町の方へ歩いて行つてゐる人は、その町がきつとあるものかどうかと言ふことを考へてはゐないものだ。たゞどんく歩いてゐるばかりだ。ソローミンはちようどこんな人だ。しかし僕は前へは進めない、後には退きたくない、と言つて一つところに停止してゐるのは退屈だ。こんな僕のやうな男が他人に道伴になれとどうして頼めよう?』一人が一つの端を擔

ぎ、他の者が他の端を擔げば、事はわけなく運ぶ」といふ諺があるか、一人が擔ぐことが出来なければ、もう一人のものはどうなるでせうか？」と言ふと、マリヤンナが、「あなたは考へ過ぎてゐらつしやるやうに思ふ。」と言ふと、「僕はお前の前に跪き、お前は僕を憐れんでゐるので、双方正直な人間であると信じてゐるばかりだ。二人の間に戀はない。」と言つた。それでマリヤンナが「今にも追手のかかる身の上で、二人は結婚してこゝを逃げればならぬのではないか？」と言ふと、「いや、その結婚はあなたの眼から見れば、旅行券と同じなのであらうが、例へ假でも二人の生活が結合することを豫定した譯になるが、それでも困らないか？」と言つた。「ではあなたはこゝを去らぬつもりですか？」とマリヤンナが訊れると、彼は「さうだ」と、殆んど口に出しかけたが、「いや、お前を保護者のないやうな境遇には決して置かぬ。」と言つた。それからマリヤンナが「あなたはなんだか奥齒に物が挟つたやうなことばかり言はないで、心の中を打ち開けて言つて下さいと

言ふと、『決して隠してはゐない。僕のすることは前もつて皆お前に言つて置くはづだから、お前が後で驚くやうなことは決してない。』言つてゐるところへ、ソロロミンが入つて来て、『こゝにゐるのは危険になつて来たから、すぐ立ち退く準備をしない。』と言つた。ソロロミンが長靴を穿いてゐるのを見て、ネズダーノフが、『君も一緒に退くのか？』と訊くと、『路が悪いから穿いてゐるので、僕がまきぞへを喰ふ理由はないはづだ……よしあつてもそれは僕のことだ、君たちは早く仕度をしたらよからう。』と急ぎ立てた。タチヤナが用があると云ふのでマリヤンナが出て行かうとすると、ネズダーノフは心細さうに、『ぜひとももう一度この部屋へ歸つて来てくれ。』と言ふので、『勿論ですわ、半時間もしたら、歸つて来ます。』と言つて彼女は出つ行つた。ソロロミンもその後には續かうとすると、ネズダーノフが呼び止めて、『大變迷惑をかけて濟まなかつた。』と握手を求めた。『何を今更改たまつてと。』笑ひながら、握手すると、『僕に萬一のことがあつたら、マリヤ

ンナを引き受けてくれるか？」と言つた。

『それは安心し給へ、君の身體からだについても安心していいし、マリヤンナは君にとつて大切な人と同じほどに、僕にも大切な人だから』とソローミンが答へると、あゝ、さうとも、あゝ、さうとも、では後ほど』

ソローミンは階段でマリヤンナに追付いたが、ネズダーノフのことをマリヤンナに話しかつたけれど黙つてゐた。マリヤンナも彼がネズダーノフのことを話したが、つてゐるのに気がつきながら、やつぱり黙つてゐた。

ソローミンが出て行くと、ネズダーノフはすぐ長椅子から飛び起き、部屋の中を二度ばかり歩き廻つて、中央まんじやうに來た時、ちよつと、ぼんやりした風で立つてゐたが、一振身を振ると、急いで商人の扮装えりを脱ぎ捨て、自分の本當の衣服きものに着換へた。それから卓子ちやうすいの抽出ひきだしから、二通の封書を取り出して、その後から何か小さい物を出して、それはポケットに入れ、封書は卓子ちやうすいの上に置いた。それから暖爐くわいの戸

を開けると、前の晩焼いた詩稿が灰になつて堆たくなつてゐた。その隅からさすがに焼くことの出来なかつたマリヤンナの肖像を取出して、封書の上に重ねて置いた。そして帽子を擱おんで戸口の方に行かうとしたが、急に引き返してマリヤンナの部屋に這入はいり、彼女の小さい寢臺の傍によつて、その枕ではなく、寢臺の脚に、泣き聲を忍んだ風で接吻したが、すぐさま帽子を肩深かたかぶに被つて、外に驅けて出た。

彼がこの工場に來た日に異様に彼の目を惹いた林檎の老木の下に來て、木の根を取り巻いてゐる黒い地面をしつかり踏張つて、ポケットからさつき卓ひまじの抽出ひきだかちとりだした小さな物を出して、彼は注意深く家の窓々を眺め、『もし誰か見てゐたら、俺は思ひ止まるだらう』と思つたが、何處にも人の顔は見えなかつた……：物皆死ものみなしにつてやつた。物皆彼に背せを向け、運命のまに／＼捨て去つたやうであつた。獨り工場が低く陰り霏々ひいひいたる冷つめたい小雨が降り注ぎ出した。曲まがりくねつた枝の間からは、低い、灰色した、何の關係もないやうに盲めひた、水氣を帯び

空が見えた。

「ペテルブルグへも歸らず、牢獄にも行きたくない、これより他に方法はなかつたんだ。」彼はかう思つて、帽子を脱ぎ捨てた。そして初めから胸悪い、烈しい倦意を全身に覚えながら、彼はピストルを胸に當て、引金を引いた……

物あつて、どんと彼を穿いた、あまりさう強くはなく……けれども仰向けに倒れた、そして自分は何事が起つたのだらう、どうして今の今タチャナの姿が眼に映つたのだらうか？と考へようとした……彼はタチャナの名を呼んで、「あつ！来るに及ばない！」と言はうとまでした。けれどもその時はすでに彼は全身麻痺してしまつてゐた……

ネズダーノフが臨終の眼にタチャナの姿を認めたのは空事ではなかつた——ネズダーノフが引金を引いた瞬間に、窓のところへ出て来て、林檎の木の下で彼を見つけた。まあこの雨の降るのにあの人には林檎の木の下なんか突立つてゐる、帽

子も被らず」かう思ふ間もなく、彼女は、ネズダーノフのバタリと倒れるのを見て、ピストルの音は低くて聞えなかつたが、何か變事だとして見て取つて、駆けつけると血が出てゐたので、「バアヴェルさん！」といつてもない聲で叫んだ。間もなくマリヤンナ、ソローミン、バアヴェル、それに職工二人が驅けて来て、彼を彼が最後の夜を過した長椅子の上に寝かした。傍についてゐるマリヤンナとソローミンとの二人は、ネズダーノフと同じほどに蒼い顔をしてゐた。彼等は二人とも、驚愕し、目眩めき、茫乎としたが、案外なことだとは思はなかつた、殊にマリヤンナはさうであつた——なんだか前から知れてゐたことで、二人ともかうなるのを待つてゐたのではなかつたらうかといふやうな氣がした。タチャナが疵口を冷水で、頭を水と酢とで濡してゐると、ネズダーノフは息を吹返して、傍に跪いてゐるマリヤンナを見詰めたが、

「僕はまだ生きてゐる……またやりしくぢつたか？僕は君達の邪摩をしてゐ

る……』それから『マリヤンナ、お前は『花をもて我を蔽へよ』といふ僕の詩を覚えてゐるだらう。その花は何處にある？　しかしそのかはりにお前がゐる……』と言つたが『あゝ、今だ、二人とも僕の前で握手を……早く……』

ソローミシはネズダーノフの身體の上に添へてゐたマリヤンナの手を握つた。彼女は疵口の上に顔を伏せてゐた。ソローミンはまつすぐに突立つたまゝ夜のやうに暗い顔をしてゐた。

『あゝさうだ……それでい……』それからもう一度『それでい……』の一言を名残にネズダーノフはついに息を引き取つた。

彼は卓の上に残した二通の手紙は彼の書置であつた、その一通はシリントンといふ友人に當てたもの、他の長い方の一通はマリヤンナとソローミンに宛てたもので次のやうな意味のものであつた。

『僕はこの手段を取つて自滅するよりほかに途はない、僕の死後二人は結婚して幸福な生涯を送つてくれ、僕は正直な人間であつたが生きてゐるよりか死んだ方が適當した人間であつたと思つてくれ。』

『マリヤンナ、お前を實際戀してゐたかどうか自分にも解らないが、お前に對して感じたよりも強い感情を生涯一度も感じたことはない、さうしてこの感情を胸に抱いて死ぬのでなかつたなら、さぞく恐しいことであつたであらう。』

『マシユリナといふ女に會つたなら、死に近づいて彼女の親切の有難かつたことを思つたと言つてくれ、これだけ言へば彼女には意味が通ずるから。』

『主義のことに一言も言及しないのは、人間は死に臨んでは虚偽の言をなすことが出来ないものなのであらう。かうして自殺したのは牢獄へ行くことを恐れたのだと思ふ人もあるかも知れないが、自分の信じてない主義のために牢獄に入るのは愚なことであると思ふばかりで、それを恐れたためではない。』

ソローミンはやがてマリヤンナを促し立て、『用意は出来てゐる、遺言を果さ

ればならぬ。』

マリヤナは、ネズダーノフの屍に近付いて、その冷めたい額に接吻して、ソ
ローミンに手を引かれて部屋を出た。

死すべき人は死んだ生きろべき人々は生き残つた、我等はこの梗概の筆を擱く
べき時になつた。最後にネズダーノフ自作の挽歌を掲げて讀者と共に彼を葬はう。

いととき友よ、戦死に行く時……

これぞ我願いなれ——

我書けるすべてものを積み

同じき時刻に焼き盡せ！

花もて我を繞せ、

我が部室に日の光を導け。

閉ぢたる戸の彼方かたには樂師だち立ち、

さは言へ、悲しき叫び泣きを禁じ、

酒宴うたげの時のその如く、

酔よひたるワルツかまひす喧しけれ！

死し行く耳に

細ほそり行く絃いとの音聞ききつ、

我も亦死すべし、眠ねむり行くこと……

されば死しの前の静しづけさを、

利益やくなき悲嘆なげまもて亂みださされ。

この世の微かすけき歎よろこびの、

微かすけき響ひびに揺ゆれつ、

我は他界に移り行かむに！

(終り)

大正三年九月三日 印
 大正三年九月七日 發
 行 局

印 證 者 著
 製 續 許 不

□ 注 意 □

エッセンスシリーズ
 ▲編輯事務は青年學藝社宛
 ▲發賣事務は福岡書店宛
 御開會初下べく候

未耕地

Essence Series

著者	廣島觀一郎	ツルゲーネフ 未耕地	郵賃金二銭
發行者	福岡新三	東京市神田區連雀町十八番地	
印刷者	渡邊八太郎	東京市牛込區櫻町七番地	
印刷所	日清印刷株式會社	東京市牛込區櫻町七番地	
發行所	青年學藝社	東京市本郷區西須賀町二番地	
發賣所	福岡書店	東京市神田區連雀町十八番地	
		代表者 文學士 中村弘 著	
		振替口座一九〇四四番	

世界學藝

エッセンスシリーズ 次目

每篇 博士、學士、大家執筆

每篇 實價金十錢 郵稅二錢
 ×印ハ倍刊ニ付實價倍額

- | | | | | |
|---|---|---------|----|---------|
| × | 1 | ゲ田長テ | 編作 | フアウスト |
| | 2 | ダンヌンツイオ | 編作 | 死の勝利 |
| | 3 | 木田長江 | 編作 | イリアッド |
| | 4 | 森田草平 | 編作 | 鴨 |
| | 5 | 加藤朝鳥 | 編 | ルツソー懺悔錄 |
| | 6 | 小宮豐隆 | 編作 | アナトール |
| | 7 | | | |

- 29 トルストイ伯遺稿 小林愛雄譯 生きてた死骸かはね
- 30 パナード、シヨオ作 伊藤野枝子編 ウォーレン夫人の職業
- 31 アンデルセン 中村古峽編 即興詩人
- 32 ハウプトマン 森田草平編 寂さびしき人々
- 33 オイケン博士 竹内楠三編 哲學入門
- 34 生田長江譯 アリストオテレス詩學
- 35 アイブセ 中村古峽編 海の夫人
- 36 スーデルマン 橋田法學士編 マグダ(故郷)
- 37 ツルゲルネフ 森田草平譯 ム

- × 41
- 38 ホフマンスタール 小宮文學士編 エレクトラ
- 39 エルンスト・ヘッケル 荒畑寒村編 科學者の信仰告白
- 40 中村武羅夫編 アウガスチン懺悔錄
- 42 トルストイ 小宮文學士編 復(カチューシャ)
- 43 生田春月譯 ビヨルンソン 短篇集

右の外五十餘篇目下翻譯執筆中に付脱稿次第續々
發刊仕候

214
10/0

歐 洲 文 壇 の 威 權

見よ!! 好評噴々たる本書を

瑞典 ストリンベルグ作
文學士 蘇武 錄 郎 譯

眞山孝治裝幀



ストリンベルグ
自叙傳狂者の告白

總クロス金文字入・美本函入・紙數三百七十頁(定價一圓)
ストリンベルグに關する寫眞版廿七葉挿入(郵稅八錢)

發 行 所

振替
一〇四
四番

福 岡 書 店

東 京
神 田

